かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 124 号

平成18年６月１日

編集　旭川医科大学
　　教務・厚生委員会
発行　旭川医科大学
　　教務部学生支援課

チューリップと風車（上湧別町）　　（写真撮影：学生支援課）

新入生を迎えて……八竹　直……2
医学科新入生を迎えて……上口勇次郎……3
看護学科新入生を迎えて……岩元　純……4
平成18年度医学科入学者名簿……5
平成18年度看護学科入学者名簿……6
平成18年度看護学科第３年次編入学者名簿……6
新入生を迎えて
医学科第６学年　朝羽　瞳……7
看護学科第４学年　田中　緑……7
旭川医科大学に入学して
医学科第１学年　青木　達也……8
医学科第１学年　山田紗矢加……8
医学科第１学年　石川　歩……9
医学科第１学年　渡部真裕子……9
看護学科第１学年　青谷　優香……10
看護学科第１学年　工藤　裕太……10
外国人留学生一覧……11
平成18年度大学院入学者名簿……11
授業評価の公表……12
平成18年度 入学式……46
平成17年度 学位記授与式……46
平成17年度 成績優秀者の表彰式……46
平成18年度 医学科・看護学科新入生合同研修会……47
教員の移動……48
窓外……藤尾　均……48

新入生を迎えて

旭川医科大学長　八竹　直

入学者選抜の難関を突破し、本学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。私ども本学教職員は心から歓迎いたします。

医療にかかわって、病に苦しむ人たちのために役に立ちたいという高い志をもって医師や看護師の道を選ばれた皆さんに深く敬意を表しますとともに、今後ともその志を忘れず、自分自身を切磋琢磨していかれることを心から願っています。

この旭川医科大学は昭和48年に設立され、今年で創立33年を迎えます。まだまだ若い医科大学ですが、すでに医学科では2913名の医学士が巣立ち、平成８年に設置された看護学科からも465名の看護学士が世の中に出ています。これらの方々の多くは第一線の医療の現場や保健行政の場で活躍されています。また医学・看護学教育の場で活躍されている方々も多数おられます。

また旭川医科大学は平成16年４月から国立大学法人として気持ちも新たに再出発をし、今までに増して優れた人材を養成、輩出したいと考え、大学の教育理念もより分かりやすくしました。

その理念とは「豊かな人間性と幅広い学問的視野を有し、生命の尊厳と高い倫理観を持ち、高度な知識・技術を身につけた医療人及び研究者を育成する。

また、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者を育てる。さらに、教育、研究、医療活動を通じて国際社会の発展に寄与する医師及び看護職者の養成に努める」というものです。

これらの理念を達成するため、次のような六つの目標を掲げています。

第一に幅広い教養とモラルを養うことにより、豊かな人間性を形成すること

第二として生命の尊厳と医の倫理をわきまえる能力を養い、病める人を思い遣る心を育てること

第三には全人的な医療人能力や高度な専門知識を得るとともに、生涯に亘る学習・研究能力を身につけること

第四として幅広いコミュニケーション能力を持ち、安全管理・チーム医療を実践する資質を身につけること

第五には地域・僻地住民の医療や福祉を理解し、それらに十分貢献しうる意欲と能力を獲得すること

第六には積極的な国際交流や国際貢献のための幅広い視野と能力を習得することとしています。

これらの目標を達成するために、医学科、看護学科ともに色々なカリキュラム改革を行ない、より実践的な教育を行っています。これによって医学科では６年の間に高度先進医療を理解し、さらにその知識を発展させる高度な専門教育を行う一方、社会から求められている「ありふれた疾患をきちんと診断・治療し、緊急事態に対処できる医師」になる教育を行っています。また目まぐるしく進歩発展する医学に対応するため生涯にわたって、自主的に学び続ける習慣を身につける問題解決型の学習方法を会得していただきます。

４年間の看護学科の教育においても改革により看護専門職として現在の医学の進歩を理解しつつ、それに合った高いレベルの看護の質を維持しつづける学習をしていただきます。

このような教育改革により、色々な工夫をしましても、大学の授業時間内で学べる部分は医学・看護学のほんの一部にしか過ぎません。その裾野に広がる多くの知識は自ら学びとらなければなりません。

さらに医療者としては、人間としての在り方や生き方に関して深く考え、自分自身の人間性を高めると共に他人に対し深い思いやりの心を持つことが要求されます。このためには大学生活の間に、多くの人との交わり、広い範囲の読書や社会活動等を通して、広く深い教養を身につけ、さまざまな学識や経験を生かした多面的なものの見方ができるように見識と品格を培うことが必要になります。

この春から、以上申しあげてきたことがらを心に留めて、心と知識と技能を大いに磨き、素晴らしい医療人として大成されますことを祈念し皆様を迎える言葉といたします。

医学科新入生の皆さんへ

医学科第１学年担当　上　口　勇次郎

医学科新入生の皆さん、入学おめでとう。

私が皆さんの学年担当です。「学年担当」という仕事は、一口でいえば、旭川における皆さんの“親代わり”ということです。勉学のこと健康のことなど、困ったことがあったら何でも遠慮なく相談に来てください。もちろん親代わりですから、成績の悪いときや怠惰な生活を送っているときなどには厳しく叱責することもありますが、私を信頼して説教に耳を傾けてください。

さて、皆さんはいろいろな経緯があってこの大学を受験し、入学することになり、いろいろな思いをもちながら講義室に座っていることでしょう。それらの思いのいくつかに対して私なりのアドバイスをしたいと思います。

１．念願の医学部に合格できたのだから一生懸命勉強して一人前の医師になるぞと思っている人へ：私から言うは何もありません。しっかり頑張ってください。

２．偏差値のレベルがこの大学に合っていたので受験したら合格したが、将来のことはあまり考えていないという人へ：もう賽は投げられたのです。一刻も早く医師になろうという覚悟を決めてください。強い決意のもとにコツコツ努力する人こそが大きく成長するのです。多少の頭の良し悪しは問題ではありません。決意をもって積極的に講義を聞く人と、いい加減に過ごす人とでは１年後に大きな差がつきます。ウサギとカメの寓話のように、入学試験での成績は下だったのに卒業の時にはトップクラスの成績になっていたという人、その逆の人、両方を私はこの30年間にたくさん見てきました。

これから１年間真剣に勉強し、医師になるということを真剣に考えた末に、どうしても医師という職業が自分に合わない（音楽家とか弁護士とか別の職業に就きたい）と思った時には相談に来てください。早いうちに決心して退学・方向転換した方が傷が小さくて済みます。親が薦めるからとか、親が病院を経営しているからという周囲の事情で自分の進路を決めないでください。誰の人生でもない、自分自身の人生なのです。

３．追加合格でやっと入学できたが、この大学の勉強についていけるかどうかと心配している人へ：今の入試の合格、不合格は１点刻みの紙一重です。たまたまある科目の問題１つを解けたか解けなかったかが運命を分けているのです。合格群と不合格上位群の間で学力の差はほとんどありません。やる気さえあれば何の心配もありません。

４．もっと格上の（偏差値ランクの高い）大学に合格できるはずだったのに、たまたまセンター試験で失敗したので、ランクを落としてこの二流大学に来てしまったと思っている人へ：皆さんはまだ知らないでしょうが、この大学にも世界に名の通った立派な先生方が大勢いらっしゃいます。受験産業が受験生の偏差値で序列化した一流、三流の格付けなど大したことではありません。私自身も外国へ留学してみて分かったのですが、世界の舞台では旭川医大も札幌医大も北大もまったく区別のつかない人が大部分なのです。大学の名前でその人物を評価するのではなくて、その人物の能力をみて出身大学を評価するのです。大学の name value にすがるばかりで中味のない人はたとえ東大にいても三流なのです。まずは自分自身の実力を蓄えることに専念してください。いずれ世界に羽ばたく機会は必ずやって来るはずです。

５．大学合格で勉強の目的を失い、ボーッとしている人へ：入試という一つのハードルを超えた現在は、進級、卒業、医師国家試験へと続くより高い数々のハードルへの出発点でもあり、もうすでにスタートは切られているのです。早く将来の目標を見定め、勉学、クラブ活動など日々の生活をその道のりの１ステップとして位置づけてください。

皆さんが本学の６年間で大きく成長していくことを期待しています。

（生物学　教授）

看護学科新入生を迎えて

看護学科１学年担当　岩　元　　純

新緑にはまだ早い旭川ですが、新入生の諸君の元気な笑顔を見ると、一足先に春が来たように感じられます。あらためて、ご入学おめでとうございます。

さて、見事に入学を果たされた皆さんにお祝いの言葉をかけると同時に、学年担当の教師として、少しばかりお話をしたいと思います。

旭川医科大学看護学科は平成８年の創設ですから、今年で、10年の節目を過ぎ、11年目に入りました。大学がその陣容を整えるに10年はかかるといわれますので、ようやく形が整ってきたところです。大学では、さまざまな授業が行われ、場合によっては高校の授業よりも随分そっけないような印象をうけて、びっくりするかもしれませんね。少しずつ馴れていきますから、あまり心配しないでください。ところで、本校教育のゴールの一つは、地域に貢献できるような優秀な看護師や医師を養成することとなっていますが、もう少し控えめにゴール設定をやりなおすと、卒業した後できちんとした社会人、あるいは、まじめな市井の一市民になることができれば、それで十分だと思います。そのような者が、立派な看護師であり、立派な医師なのです。徒に優秀さを目ざすよりも、コツコツと努力を怠らない人であってほしいと思います。ただし、専門的なスキルを身につけていることが必要条件となりますが。

最初に、看護を学ぶことについてお話ししましょう。皆さんがよく目にするように、家のなかでは、お母さんが子どもたちへの看護をいつも怠りなく行っています。このように、看護はすべての人が行う行為ですが、看護師は独立した専門職です。その専門性を特徴付けているのが一体何であるかを皆さんはこれから学んでいくのです。外からみた行為はよく似ているのですが、専門家の行うことは少し違うのです。この少しの（場合によっては大きな）違いを学ぶことは、きっと皆さんの喜びとなることでしょう。なぜなら、一見小さく見える心配りが、大きな結果の違いとなって表れる事を皆さんは経験するからです。また、皆さんは、看護を学ぶことの第一歩である「よく看る」ことが具体的に「どのように見る」ことなのかを教わります。これも、随分いろんな局面で皆さんを助けることになります。観察などというと少し大袈裟ですが、注意深く物事を見ることのコツを教えられます。この「観察」を一言で言うと、問題点を心に浮かべながら観察するのですが、その問題点をキチンと把握するための知識を最初に習得する必要があります。ただし、心に曇りがあったり、何か先入観に捉われたりしていると、観察が不完全なものになることがあります。したがって、一生をかけてもなかなか完璧な観察は難しいものなのです。

以上、小難しい話はこれぐらいにして、後半は大学生活について、すこしアドバイスを書いておきます。大学というところは、不思議なところです。時間の流れ方や人と人の関係性が一般の社会とは少し異なっています。場合によって、それがよかったり悪かったりします。濃厚な人間関係がある一方で、随分醒めた関係もあります。友情もありますが、憎しみや嫉妬もあります。無軌道な者もいますし、真面目な者もいます。一見すると、一般の社会の縮図みたいな部分もありますが、根本的に異なっているのは、大学では、多くの数の人間が、人をよく理解しようと努める姿勢を保っていることです。これからの人生のどの瞬間と比較しても、皆さんに対して受容的な態度をとってくれる人がこれほどたくさんいる環境で生活することはないでしょう。皆さんは、自分について語り、また、人の物語に耳を傾けます。このような素晴らしい時を過ごすことに感謝し、大いに語り合って欲しいものだと思います。

最後に、大切なことを一つ話して起きます。体の変調はすぐに気がつくのですが、心の変調はなかなかすぐには分からないことがあります。若いうちは一過性の心の変調が起こりやすいのですが、友人が周囲にいないと発見が遅れることがあります。朝、学校に来ていない、あるいは、最近めっきり付き合いが悪くなったなど、人間関係や生活態度に急な変調を来たした友人がいたら、できるだけ早めに知らせてください。

（看護学科　教授）

平成18年度 旭川医科大学入学式

平成18年度 旭川医科大学入学式

新入生を迎えて

医学科第6学年　朝　羽　　瞳

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。大学生活にはいくぶんか慣れてきたでしょうか。私は今年、大学生活最後の一年を迎え、大学生活を振り返る機会も多くなりました。５年目から始まる病院実習に出て、身をもって感じたことは、患者様とのコミュニケーションの大切さです。特に話をゆっくり聞くことが大切だと感じています。患者様との信頼関係を築くためには、豊富な知識を持ち合わせることも大事ですが、それと同じくらい医師の人間性も重要であり、患者様と接していると、自分の人間性が試される気がして、「自分はなんて小さい人間なんだろう」と痛感することもしばしばあります。

そして人間性を培うには、やはり人と交流するほか手段はなく、そういう意味でこれからの学生生活をいかに過ごしていくかは自分自身にかかってくると思います。私は部活やアルバイトでの経験で、様々な人から刺激を受けました。部活では、縦と横のつながりの中で社会性を育むことができましたし、皆で一つのことに打ち込み、感動を分かち合えるのも学生ならではの経験だと思います。時には熱い議論をしたりして、相手と意見がぶつかることもありましたが、そんな時こそ自分自身が見えてくることも多かったです。また病院実習では様々な年代の患者さんと接するわけですから、学外でのアルバイトでの経験も非常に役に立ちました。病院実習が始まるまでは、比較的ゆとりがあると思うので、その期間にいろいろなことにチャレンジし、吸収するのもよいかと思います。振り返ると無駄に過ごしてしまった時間やもっと勉強しておけばよかったなどの反省点はありますが、個人的には失敗や後悔も人生の肥料にしていけばいいのではないかと考えています。その時その時に必要だと思ったことを一つひとつ積みかさね、具体的に行動していった結果、皆さんの大学生活が実り多きものとなることを願っています。

新入生を迎えて

看護学科第4学年　田　中　　緑

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。期待や不安で充満した方も、そうでもない方もいらっしゃることでしょう。私が三年間本校で日々を過ごし感じることは、概ね、人に優しくすれば優しくされるということと、大学生活は濃密ゆえに短いということです。

私は旭医での毎日が好きです。新入生の皆さんにも、せっかく入学したのだから旭医を楽しんで頂きたい。そこで６つアドバイスします。

①　心の友をつくりましょう！

無論これが難しいのですが、必ずいつかできます

②　命を削って遊びましょう！

旭川の、動物園とラーメン以外の長所。それは“北海道の中央に位置する都市”です。東西南北どこへ行っても雄大な自然があなたを清めてくれましょう。

③　避妊しよう！

正しい避妊の仕方とＳＴＤについて勉強して下さい。

④　喫煙習慣をつけないようにしよう！

将来医療従事者になるかもしれない医大生は、喫煙してはいけないと思います。ましてこのご時世、もはや喫煙は社会悪です。

⑤　困ったときはホケカンへ！

多くの新入生はアイデンティティの確立という発達課題を抱えているし、初めての家事、勉強、部活、アルバイトなど仕事が山積。心身に多大な負担がかかるのは当然です。精神的に潰れそう…そんな時はホケカンで相談すると良いかもしれません。

⑥ ボランティアしてみよう！

「昔したからいい」という方もいるでしょうが、医学や看護学を学びながら体験するボランティアは、随分違った学びを与えるものと思います。実習は“医療者としての視点”を学ぶに過ぎません。雪道を車椅子で移動することがどれほど大変か、障害をもつ人が安心して利用できる施設がどれほど少ないかを、実習で学ぶことはほとんど不可能です。

伝えたいのは以上です。最後は私の好きな言葉を。

新入生の皆さんお元気で。

「ゆっくり歩け。たくさん水を飲め。」

旭川医科大学に入学して

医学科第１学年　青　木　達　也

３月23日の朝、運命の旭川医科大学の合格発表。緊張しながら僕は旭医のホームページを開いた。結果は不合格･･･30分間パソコンの画面とにらめっこしても、僕の受験番号が出てくることはなかった。では、なぜ僕がこれを書くはめになってしまったのだろうか？あの合格発表から５日経った28日の朝、すっかり浪人する気になっていた僕に変な電話がかかってきた。「旭川医科大学の者ですけど、青木さんが追加合格しました。」はぁ？僕はなんかの詐欺とかドッキリなんじゃないかと思ったけど、いま大学生やってるからそういうんじゃなかったみたい。こうして運よく僕の旭医での大学生活がはじまった。

運よくっていったけど、実際はよくなかったかも。静岡からこっちに来た僕を迎えてくれたのは、雪と寒さだった。はじめは新鮮に見えていた雪もうっとうしい白い塊に変わり、４月だっていうのに考えられないぐらいの寒さ。しかも追い討ちをかけるように、旭医の夏休みは１ヵ月だけという事実をたたきつけられ、さらに入学式だっていうのに学年担当の先生からは留年というとてつもなくヘビーな話をされ、夢のキャンパスライフへの思いはさらっと崩されてしまった････

でも、そんなことばかりではない。てか、大学のグチばっかり書けるわけがない。思いっきりうちこめて楽しい部活があるし、いい先輩や同級生たちがここにはたくさんいた。それに夏休みが少ないけど、その分勉強に専念することができる。っていうことにしておこう。とにかく旭川医科大学に入学することができてよかったです。

旭川医科大学に入学して

医学科第１学年　山　田　紗矢加

合格通知を手にした日から身の回りの整理をはじめました。入学式までは新しい生活に向けての準備や引越しでとても慌ただしく毎日が過ぎていきました。そして入学式当日、体育館で自分の名前が呼ばれた時、とても感激しました。旭川医科大学の学生になれたのだという実感が込み上げてきたのでした。

四月と言っても旭川では、桜の代わりにいたるところに雪が残っていて驚きました。一人暮らしや寒さが苦手なことなど不安は多々ありましたが、それと同時に「私はこの地で医師になるための階段を登っていくんだ」という希望もありました。

新歓合宿や新入生研修を通して同級生と親睦を深めてゆくにつれて、皆同じ志を持っていることが改めて分かり、また、このような友人たちと共に学んでいけることを心強く思います。友人たちと共に一つの問題に取り組んだり、お互いに足りない部分を補いあったりして一緒に成長して行きたいと思います。

また、新歓実習の各種検査見学によりやる気も上がりました。

これから先、学んで行く事は決して楽なものでは無いし、多くの壁にも突き当たるだろうと思います。しかし、言うまでも無く「医師になる」という目標のために頑張っていこうと思います。また部活などを通して人間関係を広げ、より多くの人に刺激されて人間的に成長して行きたいと思います。そして、学生生活を楽しみながら自分の目指す医師に近づけるように努力していこうと思います。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年　石　川　　歩

再受験生＿＿＿＿これが、旭川医大における、私の、いわばステータスです。

前の大学を卒業してからの再受験であるため、以前の受験から何年もたってしまっているので、受験勉強はやはりいろいろな面で大変なものでした。とりわけ、ほかの受験生よりも年齢が高いぶん、受験でじゅうぶんに力を発揮できるかどうかが不安でした。

入学した今では既に笑い話ですが、合格通知が届いたときに感じたのは、喜びよりも戸惑いでした。合格したことがにわかには信じられず、「自分は間違いなく大学に合格したのだろうか？」と何度も自問自答して、数日たってようやく合格の実感をつかめるようになってきたほどです。

再入学者として気になることは、他の入学生とどうしても年齢差ができてしまうことです。私は、「年齢、というよりむしろ世代の異なる同期生と、うまく折り合いをつけていけるか」ということが、入学後にまず直面する問題だと思っていましたが、入学すると、ほとんど皆初めて顔を合わせる人どうしなので、何の抵抗もなくおたがいに友達になることができました。また、再入学者は私だけではなく、意外と多くの人がいたので、年齢差を気にする必要もありませんでした。もちろん、入学直後の新歓合宿や新入生合同研修会が、互いに知り合う場を広げてくれたことは言うまでもありません。また、この先の実習や講義でも、新たに良い仲を築ける機会があることと思います。

こうして得られた人間関係を、今後の六年間のあいだ、そして卒業後も保っていくことが、今の私の期待です。同期生どうし、また先輩・後輩で互いに助け合っていくことは、医師の世界という狭い分野において、医学の知識と同様不可欠なものだと思うからです。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年　渡　部　真裕子

入学式の日。小雪が桜の花びらのように舞う中、期待と不安の詰まった白い息を切らして私は大学の敷地に足を踏み入れました。先輩方の笑顔と強烈な部活の勧誘に迎えられ、緊張にギクシャクとしながらも会場に向かったのを覚えています。こうして私はこれから続くであろう、長い医療の道のスタートラインにようやく立ったのです。

あれから一ヶ月が経とうとしています。新しい生活にも次第に慣れてきました。勉強は難しく、他のみんなと比べてハンデを感じることもありますが、毎日が挑戦に溢れていて充実しています。今後の勉強は高校のものと違い、全てが自分の夢を叶えるために必要だと考えれば頑張ることが出来るような気もしてきます。目下、先生はもちろんのこと友達や先輩にも教えてもらいながら、楽しく勉強を進める方法について考案中です。

何事にも興味を持って取り組む、ということは実践しようと思ってもなかなかすぐに出来るものではありません。忙しくなるにつれて初心は忘れやすくなり、自分の不得意とするものや嫌いなものは避けたり、惰性で行うようになってしまいがちです。一つのことを極めるのも一個人の在り方として間違ってはいないと思います。しかし、医療に携わる人間は多くのことを要求されます。つまり専門的な知識だけでなく豊かな人間性をもって他者を支えるのも仕事の一環なのだと思います。これからの六年間、少しずつでも興味や趣味を増やして、幅広い知識と関心、多角的な視野を持ったバランスの良い人間になりたいです。疾風知勁草。しっかりとした基盤のもと築くバランスの良さは、きっと私にどんな風が吹いても倒れない強さを与えてくれるでしょう。友人たちと切磋琢磨しながら理想の医師像を目指して頑張っていきたいです。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年　青　谷　優　香

旭川医科大学に入学して早くも1ヶ月が過ぎようとしています。前期の合格発表の日、その日は合格して嬉しかった。しかし、その次の日から入学式までの間はいろいろと不安でいっぱいでした。授業についていけるかという心配や親元を離れて暮らす不安を抱いていました。そのまま迎えた入学式では、玄関までの道で多くの先輩方が部活の勧誘をしていてその迫力に少し圧倒されたけども、その雰囲気を味わえてよかった。入学式の次の週から授業が始まりました。高校のときのような朝のショートホームルームの時間が無く、いきなり授業が始まり、担任の先生はいるものの書類の記入などでわからないことを聞く先生が身近にいないことに少しだけ驚きました。また、連絡事項はすべて掲示板に貼られそれを自分で見ない限りわからないということにも少し驚きました。しかし今はそのようなことにだんだんと慣れてきました。そして充実した毎日を送っています。特に今私の大学生活を充実させてくれているのは部活です。入学式の日から数日間どの部活に入部しようか迷うくらいどの部活も雰囲気がいいと思ました。そして迷った結果、硬式テニス部に入部しました。とても親切な先輩方や同級生との練習やそのほかのことが本当に楽しいです。これから4年間の大学生活では勉強だけでなく部活を始めいろいろなことを通して、人として大きく成長できたらいいなと思っています。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年　工　藤　裕　太

僕がこの旭川医科大学に入学して、約一ヶ月が経とうとしています。一ヶ月経った今でも、合格発表のあの日のことを思い出します。僕はセンター試験がうまくいかず、正直大学入学は無理だろうと思っていました。看護学校が何校か合格していたので、最終的にはそこへ行くことになるだろうと思っていた矢先、旭川医科大学の合格通知が届きました。嬉しさよりも驚きのほうが強く、僕も家族も言葉が出ませんでした。合格が決まってからの日々はあっという間に過ぎ、入学式当日を迎えました。何より先に驚いたのは男子の少なさでした。看護学科だし少ないのは覚悟していましたが、「まさかこれほどとは」というのが正直なところでした。入学式の日はほとんど誰とも話さず、このままで大学生活やっていけるのかと、とても不安になりました。しかし、新歓合宿や日々の講義などを通して、たくさんの人と交流することができ、今ではとてもいい雰囲気で学校生活を送ることが出来ています。旭川医科大学の学生は切り替えがきちんとできる人が多く、とても素晴らしいと思いました。みんなで盛り上がって楽しもうというときにはとことん楽しむし、逆に講義の時間となると、きちんと切り替えて講義に集中しているように思えます。そういった良い姿勢はどんどん吸収していきたいと思います。勉強は高校に比べると格段に専門的な分野が増えて、一回一回の講義で初めて学ぶことがほとんどです。今のところ勉強することを苦痛には思っていません。確かに今まで見たことも聞いたこともないことばかりで、戸惑うことがほとんどですが、自分で選んだ道だと思えばたいしたことはありません。これからの約四年間で、一体自分がどれだけのことを学び、どんな人間になり、どんな看護師として卒業していくか楽しみにしつつ、毎日の学校生活を過ごしていきたいと思います。

◎外国人留学生在籍者一覧

平成18年４月１日現在

氏 FamilyName 名 GiverNames	性別	国籍	学年	期間	所属
SATO, MARCELLO OTAKE サトウ,マルセロ オオタケ(通称 マルセロ)	男	ブラジル	大学院 第４学年	2002.4.1～ 2006.3.31	生体防御機構系
JANG, SEONG JAE(張 成宰) チャン ソンチェ(通称 チャン)	男	韓国	大学院 第４学年	2004.4.1～ 2007.3.31	生体防御機構系
LIU, XIAO YU(刘 暁宇) リュウ ショウユ(通称 リュウ)	女	中国	大学院 第２学年	2005.4.1～ 2009.3.31	細胞器官系
MIREGULI, MAIMAITI(米热古丽 买买堤) ミレグリ マイマイティ(通称 ミリ)	女	中国	大学院 第１学年	2006.4.1～ 2010.3.31	生体情報調節系

平成18年度　大学院入学者名簿

博士課程

氏名	専攻	研究指導教員
安住 誠	細胞・器官系	柿崎秀宏
石川訓行	生体情報調節系	笹嶋唯博
上野伸展	生体防御機構系	高後裕
神山直也	生体情報調節系	柏柳誠
北香	細胞・器官系	千石一雄
北雅史	細胞・器官系	柿崎秀宏
齊藤仁十	生体情報調節系	田中達也
坂上英充	生体情報調節系	羽田勝計

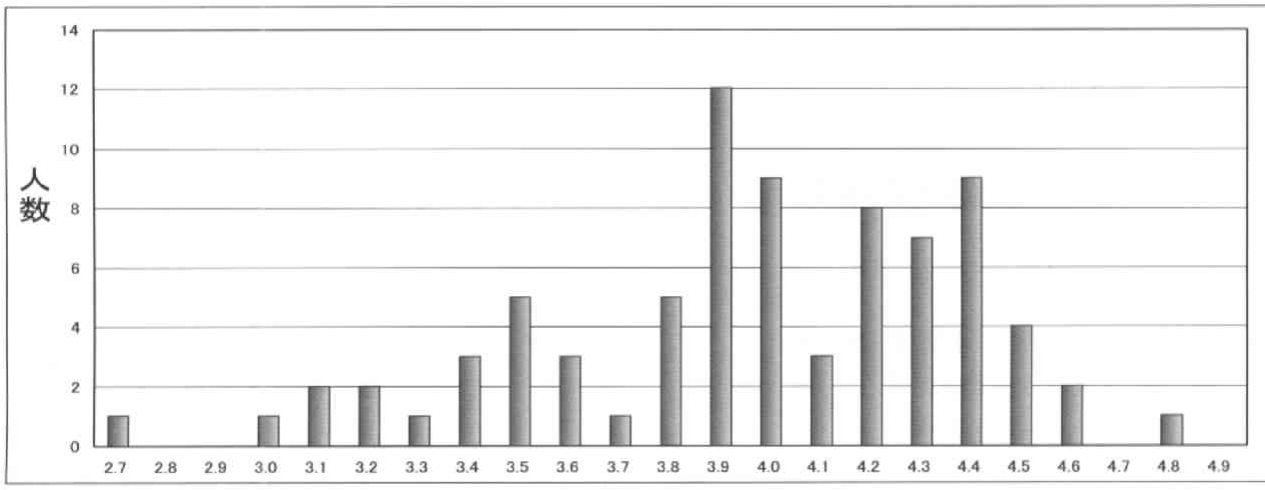
氏名	専攻	研究指導教員
佐藤一博	生体情報調節系	笹嶋唯博
更科岳大	生体情報調節系	藤枝憲二
高橋弘典	細胞・器官系	藤枝憲二
長森恒久	生体情報調節系	藤枝憲二
野村直樹	生体防御機構系	若宮伸隆
米热古丽 买买堤	生体情報調節系	藤枝憲二
山口基	生体情報調節系	笹嶋唯博
渡邊淳	生体情報調節系	羽田勝計

サロマ湖の夕日

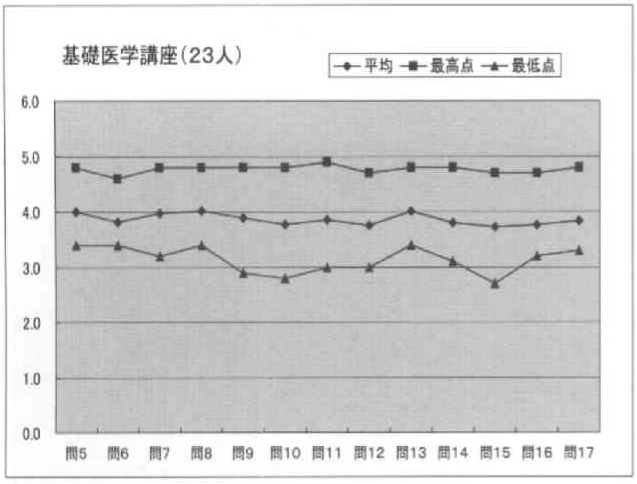
学生による授業評価(平成17年度分)の結果公表について

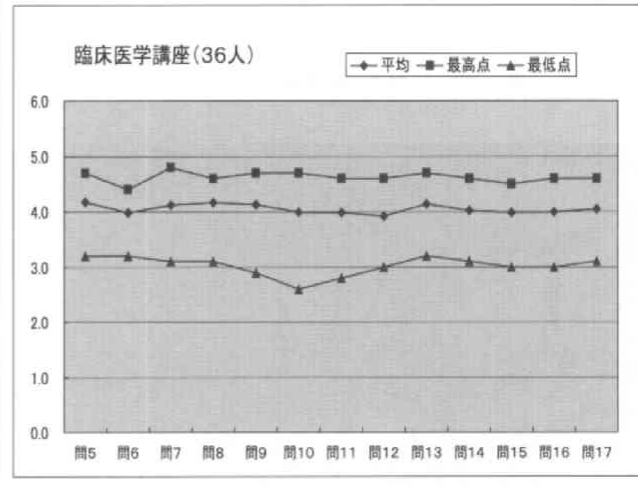
平成17年度後期「講義に対する学生評価」における全教員の得点分布

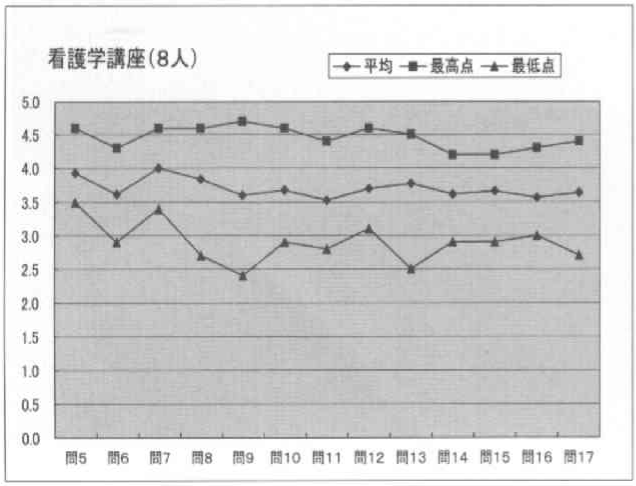
	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7	4.8	4.9
人数	1	0	0	1	2	2	1	3	5	3	1	5	12	9	3	8	7	9	4	2	0	1	0

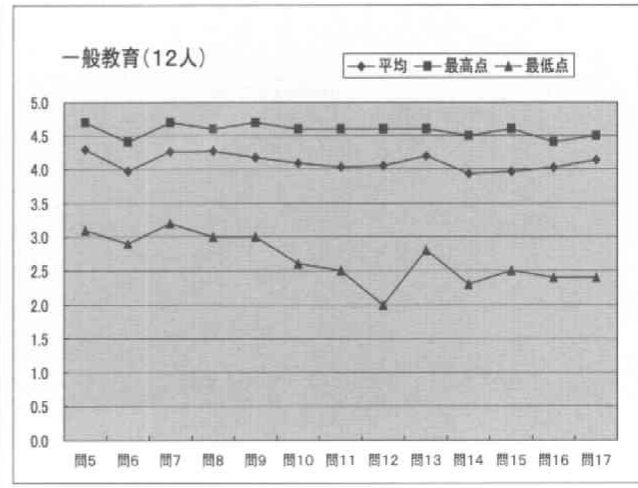


問5～17までの各平均点と最高・最低点









講義に対する学生評価

あなた自身について	問1　事前に履修要項や教科書を読むなど予習をしましたか。 問2　授業に毎回出席しましたか。 問3　授業中に授業内容を理解するための努力をしましたか。 問4　授業の復習・宿題を毎回しましたか。
講義計画	問5　各回の講義はよく準備がなされていましたか。 問6　履修要項は授業全体のポイントを理解する上で適切でしたか。
教育意欲・態度	問7　教育に対する情熱・熱意が感じられましたか。 問8　学生に接する態度は授業担当者として適切でしたか。
講義技術・内容	問9　明瞭で聞きとりやすい話し方でしたか。 問10　教材（プリント・スライド・板書など）は適切でしたか。 問11　講義において重要ポイントを強調してくれましたか。 問12　学生の反応を確かめながら講義していましたか。 問13　豊富な知識があり、かつ説明が論理的でしたか。 問14　授業の難易度は適切でしたか。 問15　各回の講義内容は量的に適当でしたか。 問16　今後の学習意欲を増す内容でしたか。
総合評価	問17　この授業は全体として満足できるものでしたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

1

薬理学講座　原　　明　義
科 目 名：基礎医学Ⅱ（医学科第２学年後期／必修科目）
日　　時：平成17年12月15日（木）　１講目
履修者数：97　　配布数：79　　回収数：63　　回収率：79.7%
＊評価結果（平均）

問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17
4.8	4.6	4.8	4.8	4.8	4.8	4.9	4.7	4.8	4.8	4.7	4.7	4.8

＊評価に対するコメント

薬理学講座　**原　　明　義**

今回の評価を大変光栄に思っております。学生にとって、薬理学は薬物名を含め修得すべき内容が非常に多い科目と思います。それらの内容を限られた講義時間のなかで、どのように解説するかが私にとって大きな課題でした。幸い、熱心に耳を傾けていた学生が多く、講義を円滑に進めることができたと思います。その意味で、学生の前向きな姿勢があっての評価と考えております。

なお、私事で恐縮ですが、本年３月末で旭川医科大学を退職し、４月より国際医療福祉大学薬学部に勤務しております。今後も旭川医科大学での経験を活かして、教育・研究活動等に力を注いでいきたく思っております。これまでのアンケートを通じて、多くの有益な意見等を寄せてくださった学生さん、どうもありがとうございました。

2

眼科学講座　吉　田　晃　敏

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅵ（医学科第３学年後期／必修科目）

日　　時：平成17年12月21日(水)　２講目

履修者数：106　　配布数：89　　回収数：55　　回収率：61.8％

＊評価結果

問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17
4.7	4.4	4.8	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.7	4.5	4.5	4.6	4.6

＊評価に対するコメント

眼科学講座　**吉　田　晃　敏**

人生には一度限りのことが数多くある。「眼科学」の講義を受けることも、将来色々な分野を専攻する学生諸君にとっては一度しかないことであろう。私は毎年「眼科学」の講義を行っているが、大部分の学生諸君にとって私の講義を受けるのは一度限りである。だからこそ私にとって、講義は非常に大切なふれ合いの時間である。

講義では、手術や他の治療にどの様な姿勢で臨むのかを伝え、また診療上の課題などを教え、その中で治療が成功した時の喜びを「共有」して頂きたい。そうすることで、将来、どのような道に進んでも、深層心理の中に財産として何かが残るだろう。そんな期待を持って、毎回その年の最新医療に関するトピックス、ICT研究を取り入れるなどの配慮をして講義をしている。

過去３年間、学生の評価ではいずれもベスト３に入ってはいるが、今回79名の教員の中で、学生諸君からベスト２の評価を受けたことは、「熱い思い」、「高い志」を持つことが医師になるために必要だと強調してきたこともあって、何かが伝わったと感じ、改めて嬉しく思っている。

これからも常に、学生諸君の評価に耳を傾け、深層心理の中に財産が築けるよう、工夫を凝らした講義を心がけたい。

「感謝」、そして「前進」の毎日である。

3

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座　林　　達　哉

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅵ（医学科第３学年後期／必修科目）

日　　時：平成17年12月９日(金)　６講目

履修者数：106　　配布数：98　　回収数：57　　回収率：58.2％

＊評価結果（平均）

問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17
4.6	4.4	4.6	4.6	4.7	4.7	4.5	4.6	4.6	4.6	4.5	4.5	4.6

＊評価に対するコメント

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座　**林　　達　哉**

集中的に多くの学習内容を学ぶことになる臓器別・系別講義Ⅵで私が心がけているのは、一つでも二つでもいいから、学習の「核」となる知識を持ち帰ってもらうことである。「核」さえ手に入れれば、それをより確かな知識に育てて行く肉付け作業は格段に容易となるし、最初はバラバラだった個々の知識が良質なミステリーを読み解くが如く一つにつながる驚きと喜びを味わうことも可能となるからである。

この度の高評価を励みとして、これからも学生の皆さんが一つでも多くの学習の「核」を手にできるよう、学生参加型でわかりやすく、面白くて印象に残る講義を目指していきたい。

以下４．４以上（上位20％内）の教員は次のとおりです。（＊五十音順）

所属名	教員名	科目名		日時	学年	履修者数	配付数	回収数	回収率(%)
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	今田　正信	臓器別・系別講義Ⅵ	必修	平成17年12月１日(木)３講目	医３	106	97	48	49.5
薬理学講座	川辺　淳一	臨床薬剤・薬理・治療学	必修	平成17年11月24日(木)１講目	医４	100	82	48	58.5
麻酔・蘇生学講座	鈴木　昭広	選択必修コースⅢ・Ⅵ 感覚器医学の最先端コース	選択必修	平成18年２月８日(水)４講目	医3・4	48	22	12	54.5
心理学	高橋　雅治	生命科学Ⅴ	必修	平成17年12月１日(木)３講目	医１	93	79	79	100.0
産婦人科学講座	田熊　直之	生命科学Ⅵ	必修	平成17年10月24日(月)３講目	医１	93	74	73	98.6
麻酔・蘇生学講座	寺尾　基	選択必修コースⅢ・Ⅵ 感覚器医学の最先端コース	選択必修	平成18年２月７日(火)２講目	医3・4	48	24	14	58.3
内科学第一講座	長谷部直幸	基礎医学Ⅰ	必修	平成17年11月22日(火)３講目	医２	97	84	78	92.9
内科学第二講座	羽田　勝計	臓器別・系別講義Ⅱ	必修	平成17年10月13日(木)２講目	医３	106	94	55	58.5
看護学科	藤井　智子	在宅看護学	必修	平成18年１月31日(火)３講目	看２	70	62	62	100.0
非常勤講師	松田　剛	心理学Ⅱ	必修	平成17年11月28日(月)３講目	看２	70	70	70	100.0
英語	三好　暢博	医学英語ⅡA	必修	平成18年１月27日(金)５講目	医２	44	31	27	87.1
産婦人科学講座	山下　剛	選択必修コースⅠ・Ⅳ 臨床感染症学コース	選択必修	平成18年２月６日(月)１講目	医3・4	32	28	23	82.1
解剖学第一講座	吉田　成孝	基礎医学Ⅰ	必修	平成17年11月８日(火)３講目	医２	97	69	64	92.8

科目全体の講義企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　事前に履修要項や教科書を読むなど予習をしましたか。 問２　授業に毎回出席しましたか。 問３　授業中に授業内容を理解するための努力をしましたか。 問４　授業の復習・宿題を毎回しましたか。
科目構成	問５　科目全体の履修目的は、履修要項やガイダンスで明確に示されましたか。 問６　履修主題間および教員間で、内容の過度な重複は避けられていましたか。 問７　各履修主題に割り当てられた時間のバランスは適切でしたか。 問８　各担当教員は履修主題に沿って授業を行いましたか。
科目内容	問９　各履修主題の難易度は適切でしたか。 問10　科目全体の内容は理解しやすいものでしたか。 問11　科目全体の履修の目的は最終的に達成されましたか。 問12　科目全体の内容は今後の学習意欲を増すものでしたか。 問13　試験や提出物（レポートなど）の量と内容は適切でしたか。
総合評価	問14　この授業は全体として満足できるものでしたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科 目 名：基礎医学特論（医学科第２学年後期／必修）
履修者数：97　　配布数：97　　回収数：94　　回収率：96.9%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.5	3.9	3.4	2.6	3.8	4.1	3.8	4.0	3.3	3.2	3.5	3.6	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.5				

＊評価に対するコメント

基礎医学特論コーディネーター　谷　口　隆　信

44名の方から事由記載のコメントを頂き、以下の３点に集約されました。
１．興味深い。　14票
２．難解だ。　11票
３．レポートが書きにくい。　11票
レポートを読んだ印象と合わせて、大多数の方が興味を持って聴講してもらえた講義が少なからずあったようで、週末の貴重な時間の中、私どもの講義に価値を見出して頂いていることが分かり安堵しています。
ただその裏返しから、難解との印象を持たれた講義もあったと言うことで、これは改善すべきと考えています。これとも関連しますが、プリントがないか不充分で、テーマや資料に苦労したという御指摘、これも改善が必要と考えます。
頂いたご意見／ご提言をもとに、次の３項目を掲げて参ります。
１．門外漢の理解を得られるプレゼンを心掛ける。
　１）履修済・履修中の講義との関連性を明確にする。
　２）履修者の到達度（第２学年後期）を考慮して適宜解説する。
２．講義の理解を助けるために、必ずプリントを配布し、テーマに関する問題提起や今後の課題についても触れる。（レポートのヒントを示す）
３．プリントには参考文献・資料を必ず記載する。

科 目 名：基礎医学Ⅰ（医学科第２学年後期／必修）
履修者数：97　　配布数：97　　回収数：94　　回収率：96.9%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.0	4.2	3.5	4.4	4.1	3.7	4.3	4.0	4.0	4.1	4.4	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
4.3				

＊評価に対するコメント

基礎医学Ⅰコーディネーター　吉　田　成　孝

本統合科目も３年目となり教員側も学生側も大分勝手がわかってきたところであると思われる。毎年の授業評価や本科目独自に行っている学生対象のアンケート調査の結果を踏まえてマイナーチェンジを行ってきている。基礎医学の中での本科目の重要性や120コマという量の多さと教員の多様性を勘案すると、今年度の評価は期待できる中でも最高の水準にあると言っても差し支えないと思われる。全体としての満足度が昨年より0.2ポイント上昇して4.3となった事は、教員全員の努力の成果であったと自負している。今年度は例年になく多くのコメントが寄せられたが、学習量に比較して授業時間数の少なさを指摘するものが多かった。これはカリキュラム全体の問題である可能性もあるので、問題提起していきたいと考える。

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅵ（医学科第３学年後期／必修）
履修者数：106　　配布数：106　　回収数：94　　回収率：88.7％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.4	4.0	3.9	3.4	4.0	4.0	3.9	4.1	3.9	3.8	3.9	4.0	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.9				

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅵコーディネーター　**松　田　光　悦**

臓器別・系別講義Ⅵは、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科頭頸部外科、歯科口腔外科の４科からなる混合講義で、105コマからなる。

系別としては感覚器系であるが、臓器別で見た場合、特に疾病論的には統一性という観点からは相当はずれている。このことから学生は相互関連の乏しい膨大な量の知識を与えられることになり、学生にとっては厳しすぎるという意見や、試験は各科別にして欲しいといった意見が多かった。昨年同様、問７，９，10，11，13の評価が低かったのはこれらのことが影響したものと思われる。本年度は、試験日を後半にしてもらい、試験時間も昨年度より延長した時間で行い、学生の負担を軽減できたと思われる。一方、各科別には、それぞれの講義は興味深く、面白かったという意見も数多くみられ、コーディネーターとしては各講座の熱意ある教育に感謝したい。

科 目 名：看護研究（統計学含む）（看護学科第３学年後期／必修）
履修者数：73　　配布数：72　　回収数：72　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.8	4.3	3.6	3.3	3.1	3.0	2.4	3.0	2.1	1.8	2.1	2.0	2.3

問14	問15	問16	問17	問18
2.1				

＊評価に対するコメント

看護研究（統計学含む）コーディネーター　**望　月　吉　勝**

この科目は、研究のプロセスに関する知識とスキルを学び、４年生での卒業研究、卒業後の勤務先での問題解決・研究につなげることを意図しています。そのために、「研究プロセスの一般論」「看護学領域での研究」「パソコンによるデータ解析演習」「卒業研究発表会への参加」という４つのパートから構成してあります。データの収集と分析のように、具体的な手法を学ぶステップがあると同時に、学術上の新たな発見という研究本来の目的のために、２つの「そうぞう」、つまりImaginationとCreationの鍛錬も含まれます。内容の多様さと、達成すべき課題の重さゆえ、負担感が強かったものと思います。

これまでも、教科書の内容を簡潔に図解したり、研究の成果物としての原著論文を手本として研究のステップを学ぶなど、工夫を重ねてきたつもりです。自由記載にあった教科書をもっと精読するよう工夫してみようと思います。

科 目 名：生命科学Ⅳ（医学科第１学年後期／必修）
履修者数：94　　配布数：94　　回収数：93　　回収率：98.9%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.1	4.0	3.8	3.1	3.8	4.0	3.8	3.9	3.5	3.3	3.7	3.5	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.4				

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅳコーディネーター　**中　村　正　雄**

昨年来の改善の結果が評価として定着しているように思えます。今年の変更は、生命科学Ⅵと重複した中村担当分を削除したことです。今年度は講義内容が難しいとの意見が増えています。講義内容は昨年とほぼ同じで、今年度のみ内容が難しいとの意見は気がかりです。講義内容はやや難しく、試験は易しい、が担当者の基本的な姿勢です。次年度は中村担当分の熱力学、反応速度論の部分を講義の最初に持っていき、これを中間試験で評価しようと考えています。多岐にわたる講義内容の試験対策が、受講生にとって容易になるはずです。

科 目 名：社会医学基礎Ⅳ（医学科第２学年後期／必修）
履修者数：97　　配布数：88　　回収数：81　　回収率：92.0%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.8	4.3	3.5	3.1	3.5	3.5	3.5	3.6	3.5	3.4	3.5	3.3	3.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.3				

＊評価に対するコメント

社会医学基礎Ⅳコーディネーター　**松　岡　悦　子**

この科目は、哲学、論理学が専門の非常勤の先生と松岡との合同の授業で、生命倫理をテーマとしている。社会医学基礎はⅠ～Ⅳまで４つの科目に分かれており、重複することなく、系統的に組み立てられるのが理想だ。だが、学生のコメントからは、今後の改善点として以下のことがあげられる。

○社会医学基礎Ⅰ～Ⅳまでの重複をなくし、系統立てること。
○授業のポイントを明確にし、学生に説明すること。
○実践的で将来役に立つだろうと思えるような内容にすること。
○評価の方法をレポートか試験か明確にしておくこと。

来年度は以上の点を考慮して、改善に努めたい。

科 目 名：社会医学基礎Ⅱ（医学科第１学年後期／必修）
履修者数：93　　配布数：93　　回収数：90　　回収率：96.8%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.7	4.5	3.8	2.9	3.6	3.8	3.7	3.8	3.7	3.5	3.6	3.5	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.5				

＊評価に対するコメント

社会医学基礎Ⅱコーディネーター　**松　岡　悦　子**

この科目は、哲学、論理学を専門とする非常勤の先生と松岡との合同授業となっている。全体の内容は、生命倫理の基礎的なことを学ぶのが中心となっている。学生のコメントからは、以下のことが改善すべき点としてあげられていた。

○授業のテーマが不明確なので、目的を明確にすること。
○前期に行われる社会医学基礎Ⅰとの重複を避けること。
○コアカリキュラムの中でのこの授業の位置づけを明確にすること。
○評価を試験で行うかレポートで行うかを事前に明確にすること。

この科目は、コアカリキュラムで要求された内容をカバーしているが、コアカリキュラムにあげられた内容のみを扱っているわけではない。来年度は以上の改善点をふまえた上で、授業の意図をもっとはっきりと学生に伝える必要があると思った。

科 目 名：生命科学Ⅴ（医学科第１学年後期／必修）
履修者数：93　　配布数：93　　回収数：90　　回収率：96.8%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.9	4.3	4.1	3.1	4.2	4.4	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	4.3	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
4.3				

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅴコーディネーター　**高　橋　雅　治**

生命科学Ⅴは、将来の医療活動に必要な基礎心理学、臨床心理学、及び、発達心理学の基礎知識をコンパクトにまとめて教授することを目的として企画された。

学生自身についての評価では、「予習」と「復習」の評価は低かったが、「出席」と「努力」についての評価は高かった。実際、授業中の受講態度は、とても積極的であった。

また、「科目構成」の４項目については、4.2から4.4という高い評価が得られた。これは、すべての講義が心理学研究室のスタッフにより行われたこと、及び、講義内容を毎年改善してきたことによると考えられる。また、「科目内容」の４項目についても、4.0から4.4という高い評価が得られた。これは、これまでに行ってきた配布資料の改訂や、講義資料のマルチメディア化が効を奏したのかもしれない。

今後は、講義時間の割には学習内容が多すぎるという問題点を改善してゆく予定である。

科 目 名：公衆衛生論（看護学科第１学年後期／必修）
履修者数：70　　配布数：70　　回収数：68　　回収率：97.1％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.0	4.1	3.6	3.5	3.8	3.9	3.8	3.9	3.9	3.4	3.7	3.5	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.6				

＊評価に対するコメント

公衆衛生論コーディネーター　**望　月　吉　勝**

問５～問14の評価の多くが3.5以上であり、まずまずの出来でしょうが、前期の健康教育論が同10問とも3.9以上だったことと比べると、厳しい評価と感じました。前期の健康教育論は、健康教育に関する様々な概念・モデルについて、広く浅く学び、看護学の各領域で活用するための準備をすることを目標にしています。Peer lectureを多用し、学生の参加型学習を促してきました。その中で学生達は、前に演じたグループの工夫を見て、効果的と思われるものを取り入れ、さらに創意工夫を重ねており、達成感が得られたものと思います。他方、公衆衛生論の守備範囲は、国家試験でいえば、看護師での公衆衛生学、保健師での疫学・保健統計を含んでおり、習得しなければならない内容が多岐に渡ります。それら全部を教えることに汲々としていたかもしれません。「健康教育論のように‥‥」という自由記載もあり、多岐に渡る内容ですが、参加型学習のための工夫をしてみようと思います。幸い、工夫を重ねてきた疫学ノートなどのプリント類は好評のようでした。

科 目 名：選択必修コースⅢ・Ⅵ「救急・プライマリケアコース」（医学科第３・４学年後期／選択必修）
履修者数：45　　配布数：45　　回収数：45　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.3	4.1	4.1	3.3	3.8	3.9	4.0	4.1	3.6	3.8	3.8	4.1	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
4.0				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ・Ⅵ「救急・プライマリケアコース」コーディネーター
郷　　一　知

第３学年、４学年合同のクラスでの講義は初めての試みであったので、どのような評価になるか楽しみであった。予測されたように第３学年からは内容が難しいという声、第４学年からは重複があるとか容易すぎるという声が多かった。できるだけ実践・参加型のコースにしていきたかったが、学生の人数と教員の人数の比からなかなか実現困難であった。今後の課題としてとらえていきたい。

医療行為には常に知識と技術が求められる。講義や実践でカバーできる知識の量には限りがあり、技術の修得や維持には絶え間ない繰り返しを含む修練がつきまとう。本コースは医師として避けられない、救命・蘇生や、急性期病態の把握と対処を考える場になるようにと設定されている。本コースを通じて医療のそのような面を考えてもらえれば幸いである。

科 目 名：生命科学Ⅵ（医学科第１学年後期／必修）
履修者数：93　　配布数：93　　回収数：91　　回収率：97.8%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.4	4.3	4.3	4.3	4.2	3.3	3.7	4.1	3.9	3.9	4.0	4.4	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
4.1				

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅵコーディネーター　**林　　要喜知**

生命科学Ⅵの評価平均点数（問４～14）は3.95であった。学生評価で指摘された点は、１）オムニバス方式の担当教員数が多すぎる、２）教員間で講義する内容に重複があり、講義内容にも統一性がない、３）内容が多岐にわたり試験の内容量も多すぎる、等であった。これらの指摘は、実は昨年度もなされていた。ただ、講義の展開順序に工夫を行ったり、その他、幾つかの改善を施したためか、評価ポイントは昨年度（3.81）より若干増加した。しかし、本質的な問題に関して大きな改善に至らなかったため、同じようなコメントが出されたのであろう。来年度に向けては、２）については担当教員でより綿密な打ち合わせをし、改善を計りたい。３）については、中間試験や小テスト等を行うことで対応したい。１）については、科目構成を根本から見直す必要があるため、引き続き協議を重ねて改善策を見い出したいと考えている。

科 目 名：選択必修コースⅡ・Ⅴ「メンタルヘルスコース」（医学科第３・４学年後期／選択必修）
履修者数：26　　配布数：26　　回収数：25　　回収率：96.2%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.2	4.1	4.0	3.2	3.8	3.6	3.6	3.9	3.8	3.9	3.8	3.8	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
3.8				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ・Ⅴ「メンタルヘルスコース」コーディネーター
千　葉　　茂

「21世紀は脳と心の世紀」といわれている。メンタルヘルスコースでは、心理学、医学、医療現場、社会学などさまざまな観点から人間の精神現象を見つめるコースである。学際的で多角的に展開されるコースであるため、予習や復習は行いにくいが、講義内容そのものは概ねよい評価が得られている。成績評価のために多肢選択の試験を実施しているが、これは基礎知識を確認するだけのもので、講義内容は大変興味あるものばかりと思っている。なお、講義を行う講義室がしばしば変更されたようであるが、その情報が十分に伝わらなかった点について学生から指摘があった。今後、学生課も十分に注意していただきたい。

科 目 名：選択必修コースⅠ・Ⅳ「臨床薬理学コース」（医学科第３・４学年後期／選択必修）
履修者数：54　　配布数：54　　回収数：52　　回収率：96.3%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.1	3.9	3.8	3.1	3.7	3.9	3.8	4.0	3.6	3.5	3.3	3.5	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.5				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ・Ⅳ「臨床薬理学コース」コーディネーター
牛首文隆、松原和夫、清水恵子

臨床薬理学コースでは、基礎薬理学で学んだ薬物が、実際の臨床の場でどのように用いられるかを学ぶことを目的としている。このため、基礎・臨床各科の先生方に薬物を中心とした講義を行なって頂いた。講義内容は、薬物の処方、様々な疾患の薬物療法とその問題点、法医学における薬物、医療経済等多彩である。一方、本コースは３、４年生合同の講義であり、そのカリキュラム進行度の違いから、当初は学年間で講義理解度に差が出る危惧を抱いた。しかし、高度な問題群からなる試験の結果は、両学年ともほぼ同じ高い正答率であり、学生諸君の努力と講義の質の高さが窺われた。学生諸君からは、講師に対する高い評価や知識の整理にたいへん役立つなどの意見を頂いた。本コースでは、今後も各科の先生方に御協力頂き、臨床の場で即戦力となるような知識の学生諸君への提供を目指したい。

科 目 名：生命科学Ⅶ（医学科第１学年後期／必修）
履修者数：94　　配布数：94　　回収数：93　　回収率：98.9%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.4	4.1	4.2	3.3	4.4	4.1	3.9	4.3	3.9	3.9	4.0	4.2	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
4.1				

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅶコーディネーター　**渡　部　　剛**

本科目の企画・展開方法に関しては、この２～３年間のブラッシュアップによってほぼ確立されたと思われる。本授業評価の評価点もここ数年で最高であり、本年度は学生および教員の双方にとって幸せな年であったと思われる。本学のカリキュラムでは、もう４年終了時の共用試験まで人体組織学を体系的に学ぶ時間はないが、今後も組織学の領域で質問・疑問が生じた場合には、気軽に担当教員まで尋ねに来て欲しい。

科 目 名：選択必修コースⅡ・Ⅴ「臨床腫瘍学コース」（医学科第３・４学年後期／選択必修）
履修者数：70　　配布数：70　　回収数：62　　回収率：88.6％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.6	4.4	4.1	3.7	4.1	4.1	4.1	4.3	4.0	4.0	4.0	4.1	4.2

問14	問15	問16	問17	問18
4.1				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ・Ⅴ「臨床腫瘍学コース」コーディネーター
高　後　　裕

臨床腫瘍学コースは、癌に関する基礎的・臨床的話題から臨床試験、緩和医療に至るまで幅広い領域を診療科の枠を超えて学習するコースである。70名の学生が選択したが、出席に関する評価が4.4と大変高く、興味を持って受講した学生が多かった結果を反映したものと思われる。学生の総合評価も4.1と良い評価であった。それぞれの専門家による得意分野の講義での内容にも満足してもらえたものと考えられる。本コースでは、講義の内容が広汎にわたることから講義を担当いただいた先生方に数問の問題とその解答・解説の作成をお願いし、あらかじめ学生に公開し、その中から試験するという方法をとった。学生の試験に関する評価が高く好評だった。今後もプールしている問題をup dateするとともに問題数を増やしながらこの方法を継続していきたいと考えている。

科 目 名：基礎医学Ⅱ（医学科第２学年後期／必修）
履修者数：97　　配布数：97　　回収数：84　　回収率：86.6％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.1	3.9	4.1	3.2	4.1	4.1	3.7	4.0	3.7	3.6	3.9	3.8	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.8				

＊評価に対するコメント

基礎医学Ⅱコーディネーター　**若　宮　伸　隆**

今回の授業評価では、第２学年前期開講の科目－例えば生命科学Ⅹ－の授業評価の時より、はるかに多くの学生諸君が、自由記載欄に積極的に意見を書き、その内容は、薬理学、寄生虫学、微生物学の３領域の講義のバランスの問題や１科目にまとめることの意味、領域毎に独立した期末試験形式等、多義に亘っていました。また、ポジティブに評価する意見のみならず、改善案を提起する意見等も複数見られました。これの意味する所は、医学科第２学年前期から後期終了までの期間における、学生諸君の授業に対するスタンスの変化であろうと思います。今後も、学生諸君の修学意欲に応えられる講義の展開を推進したいと思います。

科 目 名：選択必修コースⅠ・Ⅳ「臨床感染症学コース」(医学科第３・４学年後期／選択必修)
履修者数：32　　配布数：32　　回収数：31　　回収率：96.9%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.4	4.2	3.5	4.3	4.1	4.2	4.4	4.2	4.2	4.2	4.3	4.3

問14	問15	問16	問17	問18
4.3				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ・Ⅳ「臨床感染症学コース」コーディネーター
若 宮 伸 隆

講義の組み立ては、本コースを立ち上げた昨年度と同じであり、授業評価点も、昨年と同様に自己評価部分以外はいずれも４以上であった。医学科第３、４学年に開講し、感染症学導入授業として位置付けられる本コースは、院内感染対策に関する実践的内容の講義も含んでおり、是非、多くの学生諸君に受講して戴きたいと思います。期末試験例題集を講義期間の早い時期に配布し、落ち着いて講義を受講できるようにしました。今後も好評価を維持すべく工夫を重ねたいと思います。

科 目 名：選択必修コースⅠ・Ⅳ「生体構造機能蛋白・病態解析コース」(医学科第３・４学年後期／必修)
履修者数：47　　配布数：42　　回収数：27　　回収率：64.3%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.8	4.1	3.5	3.0	3.8	4.1	4.1	4.2	3.4	3.4	3.6	3.3	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.7				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ・Ⅳ「生体構造機能蛋白・病態解析コース」コーディネーター
伊 藤 喜 久

「生体構造機能蛋白・病態解析コース」では、基礎研究から臨床応用まで色々な角度から生体蛋白科学を履修するコースです。今年度は最初ですが、応分な評価を頂きました。ご指摘いただいたように、このコースに限らず３年生には“とても難しい”講義もあったかと思います。明年度はこの点も充分配慮し内容の改善に努めます。ただ、今多少難解でも、勉強したら勉強した成果は必ず得られるもの、基礎医学での講義がすぐに臨床で生かされる場面も経験したかと思います。

知識を得ることも大切ですが、一つ一つの講義で示される、ものの考え方、進め方、将来医師として、医学者としてもっとも必要とされる病態解析を自らおこなうことが出来るよう動機づけの機会となることを願っています。

皆さんが最も興味を引いたものを一つ選び、自分の言葉でレポートして下さい。

科 目 名：選択必修コースⅡ・Ⅴ「EBM・CPCコース」(医学科第３・４学年後期／選択必修)
履修者数：19　　配布数：12　　回収数：12　　回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.2	4.6	4.4	4.0	3.6	4.2	4.1	3.6	4.0	4.0	4.1	4.0	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
4.3				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ・Ⅴ「EBM・CPCコース」コーディネーター　**奥 村 利 勝**

「EBM・CPCコース」は今年度新規に開講した。コースは大きく二つに分かれ前半のEBMコースと後半のCPCコースからなる。総合評価は4.3であり、概ね満足できる範囲と考えた。EBMコースは当初作成したシラバスから大きく方向転換し、自分でEBMを行える実践の目標をもとに小グループによる実習で行った。受講した学生からのnegativeなコメントもなく、次年度も同様なコマ割りで講義を構築する。

科 目 名：選択必修コースⅡ・Ⅴ「加齢と適応の医学コース」(医学科第３・４学年後期／選択必修)
履修者数：80　　配布数：51　　回収数：29　　回収率：56.9%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.1	4.1	3.9	3.3	3.6	3.8	3.9	4.0	3.9	4.0	3.9	3.7	4.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.7				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ・Ⅴ「加齢と適応の医学コース」コーディネーター
松 野 丈 夫

本講は、加齢に伴う細胞から器官に至る生体の適応と破綻のメカニズムを学ぶことを目的とする。授業は、内科学第一、産婦人科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、精神科神経科、眼科、病理学第一、薬剤部、整形外科と多くの部門の教員で構成され、多方面から生体の適応と破綻のメカニズムを明らかにすることを試みた。学生からは、「興味深い聞きやすい授業であった」という評価があった反面、「もっと総論的な内容の講義があればより理解しやすいと思う」という意見もあった。また、第３学年と第４学年を合同で行う講義であるため、学生の履修達成の度合いを、筆記試験で評価することが妥当であるかという問題があげられた。異なる学年に対して合同講義を行う場合、その評価方法をどうするかについて、今後検討を要すると思われる。

科 目 名：選択必修コースⅢ・Ⅵ「糖尿病・内分泌Up-Dateコース」(医学科第３・４学年後期／選択必修)
履修者数：78　　配布数：64　　回収数：45　　回収率：70.3%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.7	4.4	4.0	3.3	3.9	3.9	4.0	4.1	3.7	3.8	3.9	3.8	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.8				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ・Ⅵ「糖尿病・内分泌Up-Dateコース」コーディネーター
羽 田 勝 計

30コマから成る本コースは、糖尿病・内分泌疾患に関わる医学的知識を基礎および臨床各分野にわたり、全11講座の協力のもと、幅広く習得することが目的であり、十分達成されていたと考える。ただし、対象は３、４年生の混合であり、各学年の知識レベルの統一が不十分であることは否めないところではあった。糖尿病あるいは内分泌疾患の成因、病態の理解に重点がおかれた内容を基本としていたためか、内容的に消化不良の学生もいたようだ。今後は、より学生の十分な理解を得られるような内容を目指しつつ、本コースが、糖尿病・内分泌の分野に対して、さらに興味をもって今後の学習につなげられる役割を持つように発展させたい。

科 目 名：選択必修コースⅢ・Ⅵ「感覚器医学の最先端コース」(医学科第３・４学年後期／選択必修)
履修者数：48　　配布数：22　　回収数：12　　回収率：54.5%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.7	4.4	4.5	4.4	4.4	4.0	4.3	4.5	4.4	4.4	4.4	4.4	4.3

問14	問15	問16	問17	問18
4.4				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ・Ⅵ「感覚器医学の最先端コース」コーディネーター
吉 田 晃 敏

選択必修コースⅢ・Ⅵ「感覚器医学の最先端コース」では、生理学第二・解剖学第一・耳鼻咽喉科・頭頸部外科・麻酔蘇生・眼科の５科がそれぞれ６、２、８、６、８コマを講義した。「21世紀は感覚器の時代」とも言われ、各科講師は、それぞれの分野で、最先端の知識を、特色ある手法で講義した結果、学生からの評価も好評であった。

次年度も、更に充実した内容としたい。多くの学生諸君の受講を希望している。

科 目 名：選択必修コースⅢ・Ⅵ「臨床遺伝学コース」(医学科第３・４学年後期／選択必修)
履修者数：19　　配布数：19　　回収数：19　　回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.6	4.5	4.4	3.6	4.5	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.4	4.4	4.4

問14	問15	問16	問17	問18
4.5				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ・Ⅵ「臨床遺伝学コース」コーディネーター
藤 枝 憲 二

2002年から臨床遺伝専門医制度が発足し、2005年には、非医師の臨床遺伝カウンセラーの養成が開始され、遺伝性疾患の患者・家族のみならず国民のニーズに応じた臨床遺伝医療と情報を提供する状況が実現化されようとしています。昨年度に引き続き、ロールプレイを交えたカウンセリング体験とその基礎となる知識の再構成を目的にシラバスが組まれています。昨年度と同様に受講者が20人前後とちょうどよい人数でしたが、昨年と異なり２学年の混合構成のため、擬似カウンセリングにおいても学生の個性が反映され、アプローチの多様性をよりよく理解してもらえたのではないかと思います。講義の内容では、分子生物学的検査の部分の重複が多いという指摘があり改善が必要と考えております。逆にカウンセリングに必要な基礎情報の入手法などの追加が必要になっていたと実感しております。受講者の知的欲求に応えることができるように、シラバスを改訂しながら、時代にそった臨床遺伝学を構成していきたいと考えております。

科 目 名：選択必修コースⅠ・Ⅳ「ニューロサイエンスコース」(医学科第３・４学年後期／選択必修)
履修者数：57　　配布数：51　　回収数：31　　回収率：60.8%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.1	4.2	3.9	3.2	3.9	3.8	3.9	3.9	3.7	3.7	3.7	3.8	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.8				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ・Ⅳ「ニューロサイエンスコース」コーディネーター
吉 田 成 孝

神経系は複雑でありかつ未知な点が多いために理解するのが難しい、しかしその不思議さから、医学的にも他の分野からも大きな興味がもたれている。本コースは通常の授業では触れる事が困難な神経系の面白さ、これからの問題点などを多角的な観点から出来るだけ理解して欲しいという事で企画された。今年度は試験の大半が終了した後に選択必修コースが開講したので、授業への集中度は昨年度よりも良好であることが講師の側からも感じられた。それによるところも大きいと思うが、昨年よりも全体の評価は向上している。昨年度は４項目あった3.5以下の項目は予習と復習に関する２項目のみとなった。最終的な目標の達成も0.6ポイントの大きな上昇となり、まずは満足のいく結果といえよう。今後もさらに充実した授業を目指して行きたい。

科 目 名：人間科学Ⅱ（看護学科第１学年後期／必修）
履修者数：70　　配布数：69　　回収数：69　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.3	4.4	3.9	2.8	3.6	3.8	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	3.9	4.1

問14	問15	問16	問17	問18
4.1				

＊評価に対するコメント

人間科学Ⅱコーディネーター　**藤　尾　　均**

看護学科１年生対象の通年45コマの必修科目である。平成17年度は、コーディネーターによるオリエンテーション１コマと歴史学系17コマ、専任教員による社会学系17コマ、非常勤講師による哲学・倫理学系７コマ、それに学長・病院長・元学長（黒田名誉教授）の特別講義が各１コマであった。

本科目の総合評価点は昨年度まで、3.6～3.7程度に低迷していた。それが今年度、初めて４点を突破し、4.1ほどとなり、ようやく念願が叶った。このようにアップした原因を次のように分析している。①新しい非常勤講師を採用し、しかも非常勤のコマ数そのものを半減させたこと。②初めて学長・病院長・元学長の揃い踏みによる入門講義が実現したこと。③歴史学系と哲学・倫理学系で試験を廃止し、平常点重視にシフトしたこと。④年度始めにオリエンテーションを丁寧に行い、勉強法や心構えを説いたこと。

平成18年度も、この評価点をキープ、ないしはこれを上回れるよう、気を引き締めて臨みたい。

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅲ（医学科第３学年後期／必修）
履修者数：106　　配布数：105　　回収数：76　　回収率：72.4％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.2	4.0	3.6	4.0	4.0	3.9	4.1	3.9	3.8	3.9	4.0	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.9				

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅲコーディネーター　**髙　後　　裕**

臓器別・系別講義Ⅲは、膠原病、感染症、血液病学を対象とした講義である。学生の総合評価は3.9と前年度とほぼ同じ評価であった。科目構成に関する評価は比較的高くこの講義の目的とするものや講義全体のバランスに関しては学生にも評価されているように思われるし、学生の出席や授業内容を理解しようとする姿勢もみられる。学生の自由意見には、時間数が足りないとの意見も多かったが、新しいカリキュラムでは、チュートリアル形式による学生の自発的な学習を主体とすることが特徴であり、その分講義形式の授業は少なくなり、講義の重複を避けながら短期集中して行なわれることから、内容も盛りだくさんとなっている。講義の予習・復習や、４学年で予定されているチュートリアル、５学年以降のクリニカルクラークシップを通して知識の習得に努めてもらいたい。

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅱ（医学科第３学年後期／必修）
履修者数：106　　配布数：106　　回収数：76　　回収率：71.7％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.2	4.2	3.6	4.1	4.0	3.9	4.0	3.8	3.9	3.9	4.0	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.9				

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅱコーディネーター　羽　田　勝　計

臓器別・系別講義Ⅱは３年生後期に内分泌代謝系疾患と腎泌尿器系疾患を中心に第一内科・第二内科・泌尿器科・小児科・耳鼻咽喉科による講義で構成されている。全コマ数は60コマで、他の臓器別・系別講義と比較して相当量のコマ数であるが、昨年同様、学生からの少数意見として「内容が膨大すぎる」、「内分泌代謝系疾患と腎泌尿器系疾患は別々の枠組みの方が理解しやすい」などがあった。その一方で、科目構成評価はほぼ４点前後と一定の理解は得られていると考える。科目内容評価についても、昨年と比較して全般的に評価の向上が見られ、昨年の反省のもと改善がありほぼ妥当な内容になったと思われる。また、他の臓器別・系別講義でも指摘されているように講義のスケジュールが短期に集中していることや一つの臓器別・系別講義全体のコマ数が多いことに対する不満もあり、臓器別・系別講義の再構成化も含めた授業全体の再構築化も今後の検討課題として残された。

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅴ（医学科第３学年後期／必修）
履修者数：106　　配布数：105　　回収数：73　　回収率：68.9％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.1	4.1	3.6	4.0	4.0	4.0	4.1	4.0	4.1	4.1	4.2	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
4.0				

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅴコーディネーター　千　葉　　茂

21世紀は、脳とこころの時代といわれている。この講義は、その領域の障害について展開される。すなわち、中枢神経系（脳・脊髄）、および末梢神経系についての重要な基礎知識と臨床医学の話である。講義の評価は、前回と比較して多くの問いで若干スコアが上がっている。この講義に関連していただいた講師陣の努力が現れ始めている。講師は、講義の開始時刻を守ること、講義の重要ポイントを強調すること、講師の間で講義全体的流れを話し合うこと、などは引き続き努力しなければならない。

科 目 名：加齢・老化と高齢者の医学（医学科第４学年後期／必修）
履修者数：98　　配布数：98　　回収数：96　　回収率：98.0%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.2	4.2	3.9	3.3	3.9	4.0	4.0	4.1	4.0	4.2	4.1	4.0	4.1

問14	問15	問16	問17	問18
4.0				

＊評価に対するコメント

加齢・老化と高齢者の医学コーディネーター　**奥 村 利 勝**

「加齢・老化と高齢者の医学」は今年度新規に開講した。これまで老年者で注意すべき医学的な問題は様々な講義で扱われてきたが、今回これらを一括して扱うと理解し講義の内容を策定した。老化に関わる遺伝子の最新知見から、加齢に伴う生体機能・臨床検査変化、老年者特有の病態・疾患、QOLの考え方などを盛り込んだ。総合評価は4.0であり概ね満足出来る範囲と考えた。項目別に見ると問１や４の授業の予習や復習の項目が、3.2,3.3と評価が低く、次年度は予習や復習を促す方策が必要であると感じた。受講した学生からのnegativeなコメントもなく、次年度も同様なコマ割りで講義を構築する。

科 目 名：臨床薬剤・薬理・治療学（医学科第４学年後期／必修）
履修者数：98　　配布数：98　　回収数：94　　回収率：95.9%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.3	4.1	3.7	4.3	4.4	4.3	4.5	4.4	4.4	4.5	4.4	4.6

問14	問15	問16	問17	問18
4.5				

＊評価に対するコメント

臨床薬剤・薬理・治療学コーディネーター　**松 原 和 夫**

本コースでは、基礎薬理学で学んだ薬物が医薬品として患者に適用される場合に、理解しておかなければならない基本事項について企画した。この企画に対する評価結果から履修目的、履修内容等は、概ね理解されたのではないかと思う。しかし、本年度は新々カリ移行後の初年度の講義であったため、充分な内容には至らなかった面も多々あると反省している。次年度からは、今年度の反省点を生かし、試験時のアンケートなども参考に、さらにより良い講義を目指していきたいと思う。

科 目 名：症候別・課題別講義（医学科第４学年後期／必修）
履修者数：98　　配布数：98　　回収数：96　　回収率：98.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.6	4.2	4.1	3.5	4.0	3.5	3.7	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
4.0				

＊評価に対するコメント

症候別・課題別講義コーディネーター　**笹　嶋　唯　博**

症候診断学は、古くから多くの教科書が上梓されているように日常診療では極めて重要な領域である。そこで今回の講義は様々な症候を学際的、網羅的に編成された企画で、これほど集中的かつ専門的に講義を受けられる機会はないであろう。症候によっては診断が多岐におよぶもの、診断の優先順位が特定されるもの、あるいは重症度の高い疾患で治療が優先される項目もある。症候診断学では、裾野が広いことから多くの講師により編成される必要があり、編成は容易でない。また大部分の講師は症候学に関する講義ノートは持ちあわせていないので、このために特別に準備されたものと思われる。講義内容の部分的な重複は避けられず、学生からの指摘があった点であるが、その調整は今後の課題である。これらの諸点を考慮すると、平均４点以上の学生評価は高いといえ、制約された時間の中での講師各位の企画講義への協力にお礼を申し上げる。

科 目 名：臨床検査学（医学科第４学年後期／必修）
履修者数：100　　配布数：100　　回収数：89　　回収率：89.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.2	4.2	3.8	3.3	3.8	4.0	3.8	3.9	3.5	3.2	3.6	3.4	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.6				

＊評価に対するコメント

臨床検査学コーディネーター　**伊　藤　喜　久**

学生講義は概ね好評を得たと理解している。内容的に測定、検査前検査、健常者を対象とするなどの独自性も興味を引いたかもしれない。予習する学生も増えてきている。検査の基本が広く浸透しているようで講演者も大いに勇気づけられる。臨床検査医学は基礎から臨床まで幅広い領域をカバーする。これらは検体検査（血液、生化学、免疫、遺伝子、病原微生物）、生理機能検査（循環機能、呼吸機能）、病理検査などが含まれ、講義によってはかなり内容的に浅く広いものと、かなり専門性を高めた内容にわかれることも否めない。従って、コアカリキュラム、国家試験基準も参考に必要最低限の内容をコース全体で担保できるよう努めている。

科 目 名：臨床医学概論Ⅳ（医学科第４学年後期／必修）
履修者数：98　　配布数：98　　回収数：95　　回収率：96.9％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.4	4.3	4.2	3.4	4.0	4.0	4.1	4.2	4.1	4.3	4.2	4.3	4.2

問14	問15	問16	問17	問18
4.3				

＊評価に対するコメント

臨床医学概論Ⅳコーディネーター　**郷　　一　知**

人の生死を救急医療を中心としてとりあつかったつもりである。

前期の系別講義と重なるところも少なくなかったかもしれないが、医師としてすべての人が考えたり、身につけたりしなければならない分野であり、今後は重複に留意しながらも、くり返す部分はくり返して講義していきたい。

科 目 名：臨床医学概論Ⅱ（医学科第３学年後期／必修）
履修者数：104　　配布数：104　　回収数：100　　回収率：96.2％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.4	4.2	3.9	3.5	4.3	4.2	4.1	4.2	4.2	4.2	4.1	3.9	4.2

問14	問15	問16	問17	問18
4.1				

＊評価に対するコメント

臨床医学概論Ⅱコーディネーター　**藤　尾　　均**

塩野副学長（法医学）３コマ、吉田教授ほか健康科学講座スタッフ６コマ、一般教育社会学２コマ、それに筆者（歴史・哲学）が４コマ担当した。科目名は「臨床医学」云々となっているがスタッフや内容は基礎医学・一般教育が中心で、発足当初から「羊頭を掲げて狗肉を売る」と批判されていた科目である。

にもかかわらず、昨年は平均3.7ほどに低迷していた本科目の評価が、２年目の今回、ほとんどの項目で４点を突破した。このようにアップした原因として考えられるのは、前期の「臨床医学概論Ⅰ」の反省の上に立って期末試験をCBTや国家試験を意識した択一問題で揃えたことと、教員間の講義内容がダブらないよう調整したことに尽きると思われる。批判的意見としては、「自分の主義・主張を押し付けるような講義をする教員がいる」「スライドだけでプリントを配らない教員がいる」が目に付いた。

また、「この科目は不要である」とする声が４名からあった。確かに、広義の倫理を扱う「社会医学基礎」（Ⅰ～Ⅳ）と「臨床医学概論」（Ⅰ～Ⅳ）とで120コマもあるというのは、多すぎるかもしれない。この点は教育課程編成委員会の審議事項としていただきたい。

科 目 名：社会医学講義（医学科第４学年通年／必修）
履修者数：99　　配布数：98　　回収数：87　　回収率：88.8％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.1	4.2	3.9	3.2	3.8	3.6	3.6	3.8	3.8	3.8	3.7	3.6	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.6				

＊評価に対するコメント

社会医学講義コーディネーター　**吉　田　貴　彦**

昨年度まで衛生学、公衆衛生学は、法医学の３科目であったが、今年度から統合科目「社会医学」として開講された。衛生・公衆衛生学は臨床医学と並行して第４学年に開講され、中毒学や各種有害因子による健康障害など症候学的な臨床医学に近い領域から、医学・保健統計、医療行政・法規など暗記が中心となる領域まで及び範囲が広いために捉え所が無く感じられているようである。医師国家試験の科目なので講義編成はコアカリと国家試験出題基準と出題傾向を意識しているが、受験は先のことであり集中しにくい面もあろう。臨床医に進むとしても予防医学的な考えは今後一層必要とされるので、そうした講義・試験も取り入れたが、理解が得られていないようである。興味を持ちやすくする工夫を心掛けたい。また、第３学年開講の臨床医学概論ⅠおよびⅡや、他の科目との重複が指摘されているが、現在全学的な見直しが進められており、その一環として見直しを進める。

科 目 名：形態機能学（看護学科第１学年後期／必修）
履修者数：60　　配布数：60　　回収数：59　　回収率：98.3％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.3	4.4	4.4	3.4	4.0	4.0	3.5	3.7	3.4	3.3	3.5	3.8	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.6				

＊評価に対するコメント

形態機能学コーディネーター　**岩　元　　純**

科 目 名：疾病論（看護学科第２学年後期／必修）
履修者数：59　　配布数：59　　回収数：58　　回収率：98.3％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.4	4.2	4.1	2.6	3.6	3.2	3.2	3.6	3.5	3.3	3.6	4.0	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.6				

＊評価に対するコメント

疾病論コーディネーター　岩　元　　純

科 目 名：代謝栄養学（看護学科第２学年後期／必修）
履修者数：59　　配布数：59　　回収数：58　　回収率：98.3％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.8	4.6	4.0	3.1	3.9	4.3	3.2	4.1	3.7	3.3	3.7	3.8	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
3.8				

＊評価に対するコメント

代謝栄養学コーディネーター　野　村　紀　子

実習企画（または演習企画）に対する学生評価

あなた自身について	問1　事前に配布された資料を読むなど予習をしましたか。 問2　実習（演習）に毎回出席しましたか。 問3　実習（演習）に積極的かつ真面目に参加しましたか。
実習（演習）計画	問4　実習（演習）の目的は履修要項やガイダンスで明確に示されましたか。 問5　実習（演習）はおおむねスケジュールに沿って行われましたか。 問6　学生数に対して指導担当者数は適切でしたか。 問7　指導担当者は適切な指導能力を備えていましたか。 問8　指導担当者間の連携は適切でしたか。
実習（演習）内容	問9　実習（演習）の内容は、関連する講義科目の内容と対応がとれていましたか。 問10　事前に配布された資料は、実習（演習）を進める上で役立ちましたか。 問11　実習（演習）によって技術を十分に習得することができましたか。 問12　実習（演習）内容の難易度は適切でしたか。 問13　課された提出物（レポートなど）の量や内容は適切でしたか。 問14　実習（演習）は今後の学習への意欲を増す内容でしたか。
実習（演習）環境	問15　実習（演習）用の設備・機材・用具などは性能と量の面で十分でしたか。 問16　安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問17　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総合評価	問18　この実習（演習）は全体として満足できるものでしたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科　目　名：実践看護技術学（看護学科第３学年後期／必修）
履修者数：73　　配布数：73　　回収数：73　　回収率：100％

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.8	4.6	4.4	4.0	4.3	3.6	4.2	3.9	4.0	4.1	3.6	3.7	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
4.0	3.8	4.1	4.1	3.9

＊評価に対するコメント

実践看護技術学コーディネーター　**服　部　ユカリ**

学生の自己評価３項目の平均は4.4であり、例年通り自己評価は高い。

演習計画の５項目の平均は4.0であり、この中では実習指導者数にかかわる項目の得点が3.6であり最も低かった。70名で演習を実施する場合、２～３人で指導せざるを得ず、より密度の濃い演習を実施するための方策が今後の課題である。

演習内容６項目の平均は3.9であり、この中で最も低かったのは、技術の習得に関する項目で3.6あった。４年制の看護系大学では、卒業生の看護実践能力を向上させることが大きな課題になっている。このことと、先の指導者数の課題とも考え合わせると、効果的な演習のあり方について検討が必要である。

演習環境の３項目の平均は4.0で設備・機材・用具の項目が最も低く3.8であった。設備等の整備も徐々に進めていきたい。

全体については3.9であり、一応の合格点ではあるが、今後さらに改善すべき点がある。

科 目 名：基礎看護技術学Ⅰ（看護学科第１学年後期／必修）
履修者数：60　　配布数：60　　回収数：60　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.5	4.7	4.7	4.6	4.6	4.2	4.2	4.2	4.6	4.5	3.9	4.2	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
4.2	4.3	4.4	4.0	4.3

＊評価に対するコメント

基礎看護技術学Ⅰコーディネーター　**升　田　由美子**

基礎看護技術学Ⅰは、今後の看護技術学習の基盤となる科目である。看護技術の習得についての評価は3.9であり、学生は看護技術を十分に習得できたとは感じていない。演習の時間内で看護技術を習得することは困難であり、学習を繰り返して「身に付けていく」ものであることから考えると、これは妥当な評価と考える。提出物の量に関しては3.7と他の項目と比較して低い。限られた演習時間を効果的に活用するための事前学習、演習を終えての自己評価を提出物として課したことが影響している。他の項目は４点台、全体では4.3という評価であった。ほとんどの学生は意欲的に演習に取り組んでいる。休暇中の実習室使用や、自己学習時に教員の助言を受けたい旨が自由記述に述べられていた。これに対して、講義の空き時間を活用した「実習室アワー」を設けて、教員の助言を受けやすい環境を整備していく。今後も目標「看護技術の習得」のために、よりよい授業づくりを目指したい。

科 目 名：生命科学実習Ⅲ（医学科第１学年後期／必修）
履修者数：93　　配布数：90　　回収数：90　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	4.9	4.6	4.1	4.6	3.6	3.7	3.2	3.9	4.3	4.0	3.8	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
3.5	4.3	4.3	3.9	3.8

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅲコーディネーター　**高　橋　龍　尚**

問８の〔指導担当者間の連携〕については、評価値が示すとおり十分ではなかったことを反省します。レポートの表現や内容についての価値基準に教員間で差があったためです。レポートを受けた際には、やる気のある学生や色々な準備を予め行ってきた学生には更なる発展を期待し、１年生のレベルを超えるような説明も個別で行いました。このような状況が成績評価について受講生に不安をいだかせたようです。全体の評価は昨年に比べ良くなっていると思われます。しかし、問18〔この実習は全体として満足できるか〕の評価は3.8にとどまっています。目標の５を目指して更に努力したいと思います。

科 目 名：基礎医学実習Ⅰ（医学科第２学年後期／必修）
履修者数：97　　配布数：97　　回収数：96　　回収率：99.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.3	4.9	4.5	4.6	4.7	4.0	4.3	4.1	4.5	4.6	4.1	4.1	4.2

問14	問15	問16	問17	問18
4.6	4.4	4.4	4.4	4.5

＊評価に対するコメント

基礎医学実習Ⅰコーディネーター　**吉　田　成　孝**

今年度の２年生は新々カリキュラム３年目で基礎医学実習Ⅰも昨年の反省点をふまえてマイナーチェンジを行った。系統解剖の時間配分を平準化し、放射線画像読影実習のコンピュータ使用を大幅に拡充した。学生の評価自体は昨年度とほぼ同様であるが、通年通り充実した実習ができたものと考えている。今年度は系統解剖での教員数も適正化されたが、もっと丁寧な指導を望む声も聞かれた。教員側にも反省すべき点はあるが、何よりも学生諸君の自主的な取組みが肝心である事をこれからも強調していきたい。全体の枠組みとしては固まったといえようが、映像機器の使用の充実を今後の第一の課題とし、学生自身の動機付けと実習全体の目標達成に向けて、さらに工夫していきたい。

科 目 名：人間科学実習（看護学科第１学年後期／必修）
履修者数：60　　配布数：60　　回収数：60　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.7	4.8	4.8	4.2	4.4	4.0	4.4	4.2	4.2	4.4	4.1	3.9	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.8	4.2	4.4	4.3	4.2

＊評価に対するコメント

人間科学実習コーディネーター　**林　　要喜知**

人間科学実習の評価平均点数（問４～18）は4.12であった。昨年度は3.98でほぼ同様の結果であった。評価内容をみると、１）レポート量や提出期限が適切であるか（問13＝3.5）、２）学習意欲を増す内容であったか（問14＝3.8）、３）実習の難易度が適切か（問12＝3.9）などの項目等が、低く評価されていた。学生評価の具体的コメントには、今後の看護教育にどのように役立つかという視点から実習内容を再考してほしいとか、説明に不親切なケースがあったので、改善をお願いしたいという個別的な要望があった。１）については、今回の提出期限が定期試験直前であったからであろう。今後、時間的なゆとりが持てるように配慮したい。２）や３）とコメントは関連することがあるので、看護教育により相応しい実習内容を包括的に検討していきたいと考えている。

科 目 名：生命科学実習Ⅳ（医学科第１学年後期／必修）
履修者数：94　　配布数：80　　回収数：71　　回収率：88.8％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.8	4.5	4.3	4.4	3.8	4.3	4.1	4.4	4.4	4.1	3.8	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
4.2	4.2	4.3	4.3	4.1

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅳコーディネーター　**渡　部　　剛**

２～３年前から、組織標本のスケッチ提出課題を減らしてほしいという意見が学生から多く寄せられるようになってきたので、本年度から思い切って提出課題を３分の１に減らし、その分、実習期間中に行うスライドテストの配点を高くした。この成績評価の方法が適切かどうかについては、さらに何年間かこの方法を継続してみる必要があると思われるが、授業評価の評点は平均４点強と昨年より向上し学生サイドからの意見もおおむね好評であった。

科 目 名：生命科学実習Ⅱ（医学科第１学年後期／必修）
履修者数：93　　配布数：89　　回収数：89　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.9	4.5	4.2	4.4	3.9	4.1	3.8	3.9	4.4	3.7	3.7	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.5	4.0	3.8	3.9	3.8

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅱコーディネーター　**谷　本　光　穂**

評価の単純平均値は昨年度の評価3.88であり、今年は3.98となっている。授業の改善の兆しが見られるようであるが、どこを意識的に改善したか思い当たらない。母集団の学生が変わったことぐらいで、誤差の範囲なのかもしれないが、概ね良い評価を受けたといってよい。ただし、問14（実習は今後の学習への意欲を増す内容でしたか）の評価が3.5（昨年は3.2）となっていて、相変わらず18個の設問中最低評価で決して良いとはいえない。より発展的で興味を増すような内容を企画する必要がありそうに思われる。前期に行っている講義（生命科学Ⅱ）と連動させると、少しは興味を増すかも知れない。しかし、時間割変更は至難の業であり、簡単に解決できそうにない。教員の指導力にかかっているのかもしれない。

科 目 名：社会医学実習（医学科第４学年後期／必修）
履修者数：98　　配布数：98　　回収数：87　　回収率：88.8%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.4	4.5	4.3	3.6	3.8	3.4	3.6	3.3	3.5	3.5	3.5	3.6	3.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.4	3.3	3.6	3.6	3.4

＊評価に対するコメント

社会医学実習コーディネーター　**吉　田　貴　彦**

社会医学実習として衛生学・公衆衛生学・法医学領域が合同実習を行った２年目である。衛生公衆衛生学領域では学生グループ毎に別個テーマの研究実習（実験、調査など）を行い、法医学領域では全員での実習と講義が行われた。基礎系実習のうち最も高学年で臨床講義等と並行して行なわれ、特に今年はCBTが実施された第４学年後期の開講であったため、実施時期や発表会・報告書等の負担量に対する批判があった。18の学生グループが個別テーマの研究実習を行った衛生公衆衛生学領域を５名の教員で担当したため、教員数、教員連携、設備・用具の充実について厳しい評価結果であり、昨年度よりも総合評価が0.4ポイント低下した。卒業後の研究に役立つ事を考慮に入れ、実際の研究に近い実習を実践するためある程度止むを得ない部分もあるが、担当教員数、実習機器などの制約があり全面見直しの必要があるかもしれない。来年度は法医学領域も全時間を実習に充て、学生グループを分担する事によって指導時間の確保を図りたい。各学生が個別に様々な実習に取組むので発表会にて体験を分かち合う事は意義があると考えている。

科 目 名：生体観察実習（看護学科第１学年後期／必修）
履修者数：60　　配布数：60　　回収数：59　　回収率：98.3%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	4.8	4.7	4.3	4.5	3.9	4.3	4.1	4.3	4.2	3.9	3.6	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
4.0	4.1	4.2	3.7	4.1

＊評価に対するコメント

生体観察実習コーディネーター　**岩　元　　純**

臨地看護学実習企画に対する学生評価

あなた自身について	問1　事前に配布された資料を読むなど、予習をしましたか。 問2　実習に積極的かつ真面目に参加しましたか。
実習計画	問3　実習目的・実習目標はガイダンスで明確に示されましたか。 問4　実習はおおむねスケジュールに沿って行われましたか。 問5　学生数に対して指導教員数と実習指導者数は適切でしたか。 問6　指導教員と実習指導者の連携はとれていましたか。
実習内容	問7　実習の内容は、関連する講義科目と対応がとれていましたか。 問8　受け持ち患者の看護の難易度（コミュニケーションも含めて）は、適切でしたか。 問9　看護過程について、指導教員や実習指導者から適切な助言が得られましたか。 問10　看護技術を実践する機会が多く与えられましたか。 問11　カンファレンスで有意義な討議・討論が行われましたか。 問12　課された実習記録・レポートなどの量は適切でしたか。 問13　実習によって看護職者をめざす意欲が十分に高まりましたか。
実習環境	問14　実習場の設備・機材・用具・物品等は必要十分な質と量でしたか。 問15　安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問16　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総合評価	問17　この実習は全体として満足できるものでしたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科 目 名：基礎看護学実習（看護学科第1学年後期／必修）
履修者数：60　　配布数：60　　回収数：60　　回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.7	4.7	4.6	4.6	4.2	4.1	4.5	4.1	4.3	3.8	4.3	3.7	4.5

問14	問15	問16	問17	問18
4.5	4.4	4.3	4.6	

＊評価に対するコメント

基礎看護学実習コーディネーター　**升　田　由美子**

この実習は、入院患者の生活や患者自身が受けている看護援助を観察し、看護に対する興味と学習のモチベーションを高めることをねらいとしている。臨床の看護師と行動を共にし、患者の様子や行われている看護を観察することが主な実習内容である。評価の結果からは、学生は予習をし、積極的に実習に臨んだと思われる。「問10看護技術を実践する機会」は、実習病棟により患者様の重症度が違い、学生の段階では介入が難しく実践機会が少なかったのではないかと考える。「問13看護職を目指す意欲が高まったか」、「問17実習は満足できたか」は、共に高い評価で実習のねらいは達成できたといえる。この学習意欲の高まりを維持し、次年度の臨地看護学実習につなげられるよう学生の努力に期待すると共に、より充実した授業・演習が展開できるよう努力したい。

科 目 名：看護過程論実習（看護学科第２学年後期／必修）
履修者数：60　　配布数：51　　回収数：51　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.5	4.6	4.3	4.3	3.8	3.5	3.9	4.1	4.2	3.4	3.5	3.3	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
4.1	4.2	3.5	3.9	

＊評価に対するコメント

看護過程論実習コーディネーター　**升　田　由美子**

看護過程論実習では、看護過程の展開・看護技術の実践とともに、実習に臨む態度、看護者としての倫理観とコミュニケーションの重要性を学ぶことをねらいとしている。概ね3.5以上の評価であったことより、学生にとってある程度満足できる学習であったと考える。実習病棟の特徴と受け持ち患者様の状況により、学生が体験する内容は多様である。臨床というダイナミックな場では、「看護技術を行う機会や実践内容」に差があることはやむを得ない。また、「カンファレンスでの討議・討論」の評価が低く、カンファレンス運営に関する準備が必要と考える。テーマに関して討論する訓練の実施を検討する。「実習記録の量」に関しては、初期計画立案の負荷が評価に反映したと考える。看護過程の展開方法の実際を学ぶために、計画立案の時間を確保したうえで、立案した内容を実践できるよう考慮する。次年度の看護過程論実習がより効果的に行われるよう努力したい。

科 目 名：地域保健看護学実習Ⅱ（看護学科第４学年後期／必修）
履修者数：67　　配布数：60　　回収数：58　　回収率：96.7％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	4.2	4.1	3.7	3.6	4.1	3.7	3.3	3.7	2.9	3.4	3.0	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.3	3.6	3.7	3.5	

＊評価に対するコメント

地域保健看護学実習Ⅱコーディネーター　**北　村　久美子**

全国的に看護系大学の増加や保健所および市町村における保健師の増員が困難な中で、看護系大学の臨地実習は地域において大きな問題となっている。北海道も全く同様である。そこで、道庁は保健所実習校の調整を行い当大学は11年度以降８保健所、６保健所、４保健所での実習であったが今年度（17年度）から２保健所に減少した。実習は上川保健所と富良野保健所でそれぞれ２週間となった。目まぐるしく変化する行政施策により現場で求められる保健師活動は大きな変革期に来ている。このような背景の中で実習に先立ち、教員が現場に赴きあるいは指導者に大学に来て頂き数回に及ぶ学生実習のための会議を持ち、これまでの実習目的・目標・内容に加え、特に実践能力を高めることも意図的に強調した実習内容とした。この度の学生評価では、昨年度と比べ「問５」「問６」の教員と指導者の数、連携は得点が高かったが、その他の項目は0.1～0.9ポイントの開きですべて低い結果であった。教員は、毎日実習現場に出向き指導者と教員が一体となって実習指導に力を入れた。その成果が「問５」「問６」に表れたようである。しかし、実習目標・内容を今、現場の保健師に求められている内容に少しでも近づけようと実践力向上を目指したところに多少無理であったことが判明した。要因の一つに１グループ当たり学生数は16～17名で個々の学生に対し丁寧な対応に至らなかったこともあり、今後は学生の満足度が高められる実習となるよう検討することが当面の課題である。

科 目 名：小児看護学実習Ⅰ（看護学科第３学年後期／必修）
履修者数：60　　配布数：57　　回収数：55　　回収率：96.5％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	4.6	4.2	4.4	4.1	3.6	3.7	4.2	3.6	3.4	3.8	4.3	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
4.0	4.0	4.1	4.2	

＊評価に対するコメント

小児看護学実習Ⅰコーディネーター　岡　田　洋　子

最も高い評価項目は学生自身についてで、実習に積極的かつ真面目に参加した（4.6）であった。健康な小児の理解に関する学習が終了した段階で実習を組んでおり、学習の時期・順序性が、実習への動機づけ・積極的参加につながっていると考える。最も低い評価項目は実習内容についてで、看護技術を実践する機会が多く与えられましたか（3.4）であった。

金曜日（帰校日）は、二つの保育園実習生が一緒になりカンファランスを開き、実習体験の共有・まとめを行ない要望等も聞いている。要望等に関する発言なし。子どもと接する体験が乏しく育ってきた学生にとって、病児を理解する学習の前提として、保育園実習は貴重な体験学習の機会となっている。18年度以降も現行の実習を継続していきたいと考える。

自由記載欄に書かれる内容をみるに、評価の意味・目的等学生の評価能力を育てる必要性を感じる。

なお、評価項目の実習内容は、病院実習と異なるためこの評価表を用いての評価には無理があります。

科 目 名：老年看護学実習（看護学科第３学年後期／必修）
履修者数：60　　配布数：57　　回収数：55　　回収率：96.5％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.5	4.6	4.2	4.4	3.8	3.8	3.8	4.0	4.2	4.0	3.8	3.8	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.9	3.9	3.9	4.1	

＊評価に対するコメント

老年看護学実習コーディネーター　服　部　ユカリ

学生の自己学習に関する２項目の平均は4.6であり、例年と同じく自己評価は高い。

実習計画に関する４項目の平均は4.1でありこれも全体としては高い評価である。しかし、この中で学生の人数と指導者数についての項目ではやや低い。指導者が少ないというのは、我々も課題と考えていた点であり、今回の評価にも現れており、平成18年度から指導者教員を１名増やして実習することにした。

実習内容に関する７項目の平均は3.9であり今回の結果の中では、やや低く、今後も実習内容の充実に努めたい。

実習環境の３項目はすべて3.9であった。実習施設との関係は強まっており、関係も徐々に整ってきているので、さらに努力したい。

全体評価は、4.1で比較的良い実習ができたと判断しても妥当と思う。

科 目 名：地域保健看護学実習Ⅰ（看護学科第３学年後期／必修）
履修者数：60　　配布数：57　　回収数：55　　回収率：96.5%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.6	4.6	4.4	4.4	4.1	4.2	4.2	4.1	4.3	3.4	4.1	3.7	4.2

問14	問15	問16	問17	問18
4.2	4.4	4.2	4.3	

＊評価に対するコメント

地域保健看護学実習Ⅰコーディネーター　**北　村　久美子**

３学年後期に位置づく実習は、地域で生活する個人・家庭・集団、地域全体を看護の対象として捉え、様々な看護体験をとおして地域保健・看護のあり方を考え実践できる基礎的能力を養うことを目的にしている。本実習は、10月11月にわたり市町村役場、訪問看護ステーションでそれぞれ１週間ずつ行った。

市町村役場の実習は、従来からお世話になっている町役場（愛別町、上川町、当麻町、東神楽町、上富良野町）と今年度初めての富良野市で行った。また、訪問介護ステーション（６カ所）の実習は、従来からの施設以外に今年度から森山メモリアルおよびめぐみ訪問介護ステーションにお世話になった。実習前には実習市町の地区視診（地区診断）、地域保健看護技術演習を実施し演習では、学生個々に実技試験を行い結果を学生にフィードバックするなど工夫を試みた。また、初めての実習施設には実習開始前の指導者会議、教員が現地に出向いての打ち合わせを行うなど実習の準備を行った。

今回の学生評価は、昨年度に比べると全ての項目において上昇していた。総合評価は昨年度は4.0、今年度は4.3であった。このことは学生自身が講義・演習などの学びを初めて体験する看護場面で生かせるよう積極的に努力して実習に取り組んだ成果と思われる。教員と指導者の連携がとれており、特にご多忙の中を指導者によるきめ細やかなご指導のお陰と感謝している。結果を指導者と共有し、今後もより有意義な実習となるよう創意工夫し改善に努めたい。

科 目 名：精神保健看護学実習（看護学科第４学年後期／必修）
履修者数：57　　配布数：49　　回収数：47　　回収率：95.9%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.8	4.4	3.7	3.9	3.5	3.1	3.6	3.5	3.2	2.9	3.3	3.5	3.1

問14	問15	問16	問17	問18
3.5	3.6	3.4	3.4	

＊評価に対するコメント

精神保健看護学実習コーディネーター　**新　開　淑　子**

精神看護における援助技術は、患者と看護師の対人関係形成を基盤としている。なぜなら患者は看護師との関係が深まるにつれ、自分の内面をより一層表出し、看護師と共に問題解決への道を歩もうとするからである。従って、看護師が患者との間に対人関係を発展させる能力を持ち合わせていないと、患者理解が表面的となり、共に問題解決への道を歩むことができない。本実習では、学生は患者との対人関係形成の難しさに直面し、悩み、試行錯誤しながらでも患者に受け入れられる体験をすることが重要となる。この過程をうまく乗り越えられるよう指導していくのが指導教官および臨床実習指導者の一つの役割である。しかし学内事情より、今年度から各実習グループに１名の指導教官を配置することができなかった。実習へ支障がないよう実習運営を検討し、必要に応じて指導教官への指導も行っていたが、指導教官が常時いないことへの不満や指導内容への不満が一部の学生から聞かれた。今後も指導教官の配置を増やすことはできないため、指導教官と臨床実習指導者の協働・連携の方法と内容を検討し、充実した指導体制が整えられるよう改善していきたい。

科 目 名：小児看護学実習Ⅱ（看護学科第４学年前期／必修）
履修者数：57　　配布数：49　　回収数：46　　回収率：93.9％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.9	4.4	3.7	4.1	3.7	3.5	3.4	3.9	4.0	3.4	3.7	4.0	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
3.6	3.8	4.0	3.9	

＊評価に対するコメント

小児看護学実習Ⅱコーディネーター　**岡　田　洋　子**

高い評価項目はⅠ.と同様学生自身についてで、実習に積極的かつ真面目に参加した（4.4）であった。健康な小児に関する学習と保育園実習、健康問題を有する小児および家族に関する学習、さらにペーパーペイシェントによる事例展開、ケア技術の演習後病院実習が組まれている。この学習の時期・順序性が、実習への動機づけ・積極的参加につながっていると考える。

最も低い評価項目はⅠ.と同様に実習内容についてで、実習の内容は関連する講義科目と対応がとれていたか（3.4）、看護技術を実践する機会が多く与えられたか（3.4）であった。昨年、育休代替教員と実習指導者の連携が（3.1）低い評価であった。今年は菅野助手が育休から復職（3.5）、改善がみられた。助手の指導方法に好感を抱き、学生は評価している。

自由記載欄に、病棟編成のため８日間あった実習が５日間に短縮になった点とあらたに設定した外来実習について、問題提起があった。尤もな提起と受け止めるが、もう数年現行を継続した後評価をだし、検討したいと考える。

科 目 名：母性看護学実習（看護学科第４学年前期／必修）
履修者数：57　　配布数：49　　回収数：47　　回収率：95.9％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	4.3	4.2	3.7	3.5	3.7	4.2	3.6	3.9	4.0	3.3	3.5	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.8	4.0	3.6	3.6	

＊評価に対するコメント

母性看護学実習コーディネーター　**野　村　紀　子**

母性看護学実習は、産科病棟で実践され、実習の対象者であるお母さんや新生児への看護の実践は、毎日変化する。また、健康である対象者への看護実践は、他の実習とは大きく異なり、セルフケアを中心に実践される。患者を対象とする実習とは、その考え方は大きく異なることから、いつもとまどう学生が多い。

その点を理解して実習を展開しているつもりだが、日々の展開の早さから、学生によっては、カンファレンスの持ち方、実習を通して意欲の減退を感じるのかも知れない。

科 目 名：成人看護学実習Ⅱ（看護学科第４学年前期／必修）
履修者数：57　　配布数：49　　回収数：47　　回収率：95.9％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	4.4	3.9	4.0	3.8	3.4	3.5	3.8	3.6	3.2	3.6	3.6	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.8	3.9	3.6	3.7	

＊評価に対するコメント

成人看護学実習Ⅱコーディネーター　**阿　部　修　子**

「成人看護学Ⅱ」は、主に慢性疾患患者を対象に、内科系の２病棟で実習を行っており、比較的セルフケアレベルの高い患者様を受け持たせていただいている。「成人看護学実習Ⅱ」の学生評価は、直接的な看護援助を行う機会の多い「成人看護学実習Ⅰ」と比較して全体的に低い。直接的な看護援助を実施する機会が少ない３週間継続しての看護過程の展開に学生は、困惑したり困難さを感じていると思われる。しかし、この実習を通して「看護過程の継続した展開が理解できるようになった」と考える学生もおり、今後学生の実習に対する達成感が向上するようにきめ細やかな指導ができるように「成人看護学実習Ⅱ」の展開を考えていきたい。

科 目 名：成人看護学実習Ⅰ（看護学科第４学年前期／必修）
履修者数：57　　配布数：49　　回収数：47　　回収率：95.9％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	4.4	4.0	4.0	3.8	3.8	3.7	3.8	4.0	4.1	3.7	3.7	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.9	3.9	4.0	4.1	

＊評価に対するコメント

成人看護学実習Ⅰコーディネーター　**阿　部　修　子**

成人看護学Ⅰは、主に周手術期を対象に外科系病棟２病棟で行っている。本年度より手術室見学実習と学内での看護技術演習を実習に加えた。これにより学生は、手術を受ける患者様に対するイメージを持って実習を行なうことができるようになったと思われる。昨年度の評価で課題だった、講義・演習との関連性についても、評価は改善しており、学内での看護技術演習および教員による技術評価を加えたことで、学生に既習学習内容を実習でどう活用するのか考える機会となったと思われる。また今年度より、各病棟に教員を配置したことにより、病棟と実習指導者との連携に関しても評価が上がり、成人看護学実習Ⅰの総合評価の改善につながったと考えられる。

平成18年度　入　　学　　式

医学科・看護学科の入学式が４月７日（金）10時から本学体育館において挙行されました。

式では、医学科90名、看護学科60名、看護学科第３学年編入生10名、合わせて160名の新入生を代表して医学科　青木達也くんが宣誓を行い、医学生・看護学生としての自覚を新たに、大学生活の第一歩を踏み出しました。

▲宣誓を行う青木君

平成17年度　学位記授与式

平成17年度学位記授与式が、３月24日（金）10時30分から本学体育館において挙行されました。

本学室内合奏団が奏でる調べのなか入場し、医学科99名、看護学科66名、合わせて165名の卒業生の各代表者へ、学長から学位記が授与されました。

引き続き、博士課程12名、論文博士１名、修士課程12名の各代表者にも学位記が授与されました。

ついで、学長から卒業にあたり、式辞が述べられました。

式の終了後は、学生食堂を会場として祝賀会が開催され、本学の学生としての最後を噛み締めているようでした。

▲学位記授与式

▲祝　賀　会

平成17年度　成績優秀者の表彰式

平成17年度　成績優秀者の表彰式が３月24日（金）10時30分から挙行されました学位記授与式の中で行われました。

医学科２名、看護学科２名、合わせて４名の成績優秀者が選出され、学長より一人ひとりに記念品が授与されました。

なお当日は、課外活動で顕著な成果を上げた者への学生表彰も行われ、卒業生１名が表彰されました。

表　彰　式▶

平成18年度　医学科・看護学科新入生合同研修会実施される

今年も新入生の合同研修会が、４月17日（月）、18日（火）の２日間にわたり本学で行われました。

１日目は、９時から看護学科棟大講義室にて各グループごとに着席し、塩野副学長の挨拶に始まり、医学科学年担当の生物学上口教授のオリエンテーションを受けた後、医学科そして看護学科は場所を移動し、ともに今後の学習展望及び医療従事者としての心構えの説明を受けました。

午後からは、旭川消費者協会副会長の宮島睦子氏による「悪質商法の実態と防止策」、本学医学部微生物学講座の若宮伸隆教授による「エイズの現状とその課題について」、同じく本学医学部内科学鈴木康秋助手による「お酒との正しいつきあい方」、及び本学医学部内科学長谷部直幸助教授による「健康を考える医学生らしい生活習慣のすすめ」の講演を聴き１日目が終了しました。

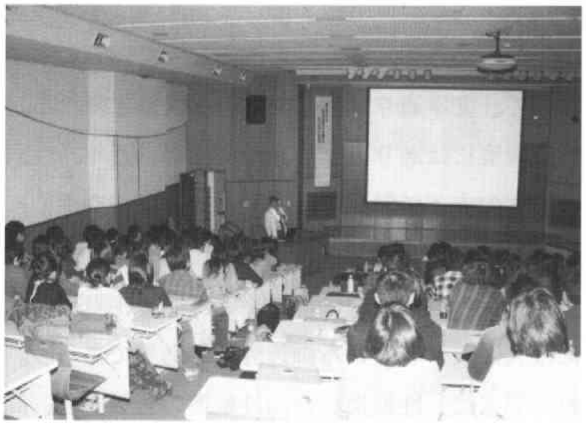
２日目の午前は、各グループに分かれ、「主体的な学習への取り組み方について」、「どの様な医療従事者を目指したいか」という課題についての討論とグループの代表による発表会が行われました。最初はぎこちなかった討論も時間が経過する毎に真剣さを増して白熱した意見を戦わせるほどになりました。また、発表にあたっては流暢なスピーチをこなし会場を沸かせる者や、イラストなどに隠れた才能を発揮する者がいるなど驚かされる場面が多々ありました。

午後からは、各グループに分かれ救急蘇生実習及び手話の講習を受け、ぎこちない動きの中にも医療現場にたずさわる者としての雰囲気を十分に味わったようでした。

救急蘇生実習（1）

救急蘇生実習（2）

手話の講習（1）



合同研修会　講演

手話の講習（2）

教員の異動

採用	18.4.1	健康科学講座	助教授	西條泰明	退職	18.3.31	看護学講座	教授	野村紀子
昇任	18.4.1	皮膚科学講座	助教授	山本明美	辞職	18.3.31	薬理学講座	助教授	原　明義
	〃	薬理学講座	講師	結城幸一		〃	外科学第一講座	助教授	稲葉雅史
	〃	泌尿器科	講師	奥山光彦		〃	皮膚科学講座	助教授	橋本喜夫
	〃	麻酔科蘇生科	講師	鈴木昭広		〃	泌尿器科学講座	助教授	橋本　博
転出	18.4.1	入学センター	助教授	大谷　奨		〃	放射線科	講師	峯田昌之

寄　外

歴史・哲学　教授
藤尾　均

セイ転換は「大変だァ」

私事にわたり恐縮であるが、3月31日、51歳にして婚姻届を提出した。超晩婚であるが、人生80年時代といわれる今日、それも悪くはなかろう。諸般の事情で私が妻の戸籍に入ることにした。つまり私がセイ転換をした。性転換ならぬ姓転換である。

とはいえ、旧姓（近藤）と現姓（藤尾）とで「藤」の一字が共通しているためか、まだ姓が改まったという実感はあまりない。旧姓のころは後ろに「藤」が付く姓の方々に親近感を覚えていたが、前に「藤」が付く姓のことはあまり気にしたことがなかった。今回のことがあって、あらためて電話帳や本学職員録を見直してみて驚いた。たくさん載っている。日本は意外に「藤」だらけの国なのだとつくづく思った。

それはともあれ、改姓したことにより、思いもかけぬ煩わしい事態となった。まず印鑑を作って市役所に登録した。身分証明書や保険証は職場ですぐに作り変えてもらったが、ほかに、銀行預金口座、不動産の権利書、生命保険の証書、病院の診察券、電気・ガス・水道・NHK・NTTといったいわゆる公共料金など、名義変更が目白押しであった。しかも、それぞれ手続きの仕方や書式が異なり、じつに煩わしかった。ほかに、郵便局や新聞販売店などへも届出をし、遅ればせながら友人・知人への挨拶状も発送した。もっとも私の場合、運転免許・医師免許といった類のものは一切ないから、これでもまだ楽なほうなのであろう。婚姻に伴って改姓するのは若い女性が圧倒的に多いが、その御苦労がよくわかった。とはいえ、身近な既婚女性の体験談によると、そうして煩わしいながらも改姓手続きを重ねていく中で、結婚したという実感も徐々に湧き、歓びも湧いてきたそうだ。私の場合は、年のせいか、あるいは男だからか、そんな歓びは見出せなかった。ただただ疲れた。

遠藤周作の往年のユーモア小説に「大変だァ」というのがある。放射線を浴びた鶏をヤミ鍋会で食べた男が、ある朝、自分が女性になっていることに気づいて、文字通り「大変だァ」と大騒ぎになる。これは現実にはあり得ない話であるが、近年、性同一性障害の方々に対しては、ホルモン療法や手術による性転換が医療の選択肢の一つとして確立されてきた。本人の自己決定に基づくとはいえ、転換の前後には人知れずいろいろ御苦労もおありであろう。それを思えば、性転換ならぬ姓転換の苦労など、高が知れているというべきか。